
ハルゲンファウスの魔法使いと少年

須賀 隆太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルゲンファウスの魔法使いと少年

【Nコード】

N1835F

【作者名】

須賀 隆太郎

【あらすじ】

魔法学院史上、最高レベルの魔力を持つと言われる少女、キララⅡシユプール。そんな彼女が、学院を抜け出して人間界へ。果たして、どうなるのか？ この作品は、作者の親友が序盤の原作を作り、作者に託したものです。ただし、原作のある序盤も自分流に改稿してあります。

VOL・01：大・脱・走！（前書き）

初めまして、あるいはお久しぶりです。

今作はあらずじに記したとおり、リアルの親友から作品を託された、言わば原作つきの物語です。

もしかしたら過去に友人がわずかな期間だけ活動したときの片鱗が残ってるかもしれないですが、託されたあと、大幅な改稿を加えてありますので、また新たな物語として、お楽しみいただければ、と思います。

それでは、長い前書きになりましたが、本編をどうぞ。

VOL・01：大・脱・走！

ここは魔法を扱う者たちが暮らす世界、ハルゲンファウス。セントラ
ルシティ都市に程近い街にあるトラフェルス学院の教室の窓から、少女がひとり、ぼんやりと外を眺めて何かを考えているような表情をしていた。

「どうした、キララ？ 元氣ねえな、お前らしくねえぞ」

その様子を見ていた少年が、背後から声をかけた。

「あつ、ガレリア……なんでもないよ。ただ……」

キララと呼ばれた少女は振り向くと、なんでもないと言って笑ってみせた。しかし、その笑みにはどこか陰があった。

「ただ……なんだよ？ 俺らガキの頃から一緒に育ってきた、幼なじみだろ？ そんな俺にも話せないようなことなのか？」

少年、ガレリアは少し怒ったような口調でキララを問い詰める。

「……ううん、そんなんじゃない。ただ、あまりにも今の生活が退屈すぎてため息ついていただけ。ガレリアが心配するようなことはなんにもないよ」

キララは少し黙ったあと、ようやく口を開いてそう答えた。

「退屈、か。まあ、それは仕方ないよな。お前はこのトラフェルス学院史上最高レベルの魔力を持つ、未来の超エリートコースを約束された学生。普段の基礎魔法はおろか、応用魔法も自由自在に使いこなすもんな。フツ、それに比べて俺の成績の悪さと来たら……」

ガレリアは自嘲するような吐息とともに、幼なじみと自分との差を嘆いた。そのせいで、次にキララが言った言葉の重要な部分を聞き逃した。

「だからね、——と思うの」

「へっ？ いまお前なんて言った？」

ガレリアが聞き逃した部分を聞き返すと、

「聞いてなかったの？ だから、あたし、ここから脱走して人間界に行こうと思ってる、って言ったの」

キララはガレリアが聞いてなかったことに怒りを覚えつつも、もう一度説明した。

「はあ！？ 脱走って、お前、それ本気で言ってるの？ しかも人間界に行くなんて、両方とも校則で固く禁止されてることじゃねーかよ！ 校則破りは最悪退学もありうるんだろ？ なんでそんなにスク高いことを……」

ガレリアはまさかキララがそんなとんでもないことを考えてるとは思ってたので、つい声を荒げてしまった。

この学院は全寮制で、入学したら、基本的に卒業まで夏休みなどの長期休暇以外は実家への帰省はおろか、校外へ出ることすら許されていないのだ。生活用品は、学院の敷地内に商店街が併設されているので、そこで全て揃うのだ。

「要は捕まらなければいいだけでしょ？ あたしは魔力が高い分、フロイア飛行魔法の速度は先生にだって負けない自信があるわ。人間界へのゲートまで逃げ切れればいいんだから、楽勝よ」

キララはペラペラと脱走計画をガレリアに話していった。

「なあ、さつきから上機嫌に俺に計画を話してるけど、俺はすぐにも告げ口に行けるし、間に合わないなら俺自らお前を止めにかるぜ。そうじゃなくても、校門には脱走防止センサーがついてるから、一歩外に出ればすぐに先生が来る。せつかくお前は優秀な成績でエリートコースを歩めるんだから、退屈でもそのままにいるよ」

ガレリアはなんとかキララに思いとどまらせようとするが、

「ねえ、ガレリア？ あんたごときの実力でこのあたしを止められるなんて思っていないわねえ？ あんたが告げ口して先生が止めに来たとしても、それを追い払ってあたしは行くわ。でもまあ、余計なリスクを抑えておくにこしたことはないわね。とりあえずあんたはここで動けなくしておきましょう。覚悟なさい。——自然の力、ここに解き放たれよ！」

ボルトン・クラウデス
“雷雲”」

キララは笑いながら懐からスツと細い杖を取り出し、軽く振って先端をガレリアに向け、意味ある言葉を紡ぐ。すると、杖の先から黒い雲が出現し、ガレリアを取り囲む。

「ちょ、キララ、待った！ やめ……」

しかし、最後まで言い切る前にガレリアは黒雲に包まれ、続けざまに雲の中で放電が行われ、彼は黒こげになって床に倒れた。

「これでよし、と。ごめんね、ガレリア。じゃあね」

キララは教室の入り口からそう言い残すと、外へと飛び出した。

「……………（行くな、行かないでくれ、キララー！）」

ガレリアは体が痺れて動けず、声も出せないため、目線だけでキララに訴えるが、2人の視線は交錯することなく、キララの姿は見えなくなった。

一方、飛行魔法で飛び立ち、校門を飛び出したキララは、ガレリアの忠告どおりに作動した脱走防止センサーに引っかかり、2人の教師の追跡を受けていた。

「学生番号35163、キララ・シュプール、すぐに止まりなさい。脱走は重大な校則違反です。今止まって引き返せば、数日の謹慎処分で済むでしょう。どこへ行くつもりですか！？」

追っ手のひとりはキララたちの学年主任・トリー・チキレースだった。彼は優等生のキララがなぜこんなことをしたのか理解できず、考えながら追いかけていたので、キララの言葉に一瞬気づくのが遅れた。

「トリー先生、あたしはもう退屈な毎日にはウンザリなんです。だから、人間界でしばらく修行してきます。これ以上邪魔するつもりなら、たとえ先生でも容赦なく撃ち落としますよ？」

キララはやんわりと脅しをかけ、彼女の魔力の高さ、つまり魔法の威力の高さを知っているトリーはひるんだ。その隙にキララは速度を上げ、一気に引き離そうとしたが、もう1人はまだ諦めずに追ってきた。

「キララ君、待ちたまえ。学生の身で人間界へ行くなど許さんぞ。そもそも、なぜ人間界へ行くことを禁止してるのか、君は知ってるのか？ たしか、私の授業で小話程度に話したと思うが」

諦めずに追いかけて来たのは、キララやガレリアの担任、ガランスⅡダンボルドだった。

「ええ、知ってます。人間は魔力を持つておらず、魔法という便利な能力は利用されてしまう運命にあるから、それを防ぐためですよ
ね」

キララは一度止まり、ガランスと話をつけることにし、ガランスの問いに答えた。

「その通りだ。さすがは授業の小話までよく聞いて理解している。だが、そこまで知っていて、なぜそれでも行こうとするのか、私には理解できない」

ガランスも無理に捕まえに迫ることはせず、一度説得を試みるために少し距離をおいて止まった。

「一応、あたしはそう答えました。でも、本当にそうなのか、見てみたいんです。本当に人間は魔法の存在を知ったときに利用しようとするのか。仮に利用されようとも、それもあたしにとっては修行になりますし、利用されなくて、過去の教えが間違ってたならそれは今後の世界間交流とかにも役立つのではないですか？ ガランス先生、お願いです、ここは退いてください」

キララは持論を披露し、ガランスに退くよう求めた。

「それが君の考え方か。まあ、頭ごなしに否定するようなことはしないが、私も仕事なんだね。校則違反の生徒をみすみす見逃すことはできないよ」

ガランスは静かに首を振って、きっぱりと言い放った。

「やっぱり退いてはくれませんか。でも、あたしだって譲れません。すみませんが、撃ち落とします。悪く思わないでくださいね」

キララは話は終わりだ、と言わんばかりに捕まえるために突撃してきたガランスをかわしつつ杖を出すと、そのまま先をガランスに

向けて、叫んだ。

「――荒れ狂う風よ、巻き起これ！　バーストウ・ウインダム “烈風爆裂波”！」

瞬間、杖の先から激しい風が渦を巻いて吹き荒れ、接近するガランスを吹き飛ばすと同時に、自らの推進力に変えて飛び去り、人間界へ続くゲートを突破して魔法世界ハルゲンファウスを脱出したのだった。

VOL・01：大・脱・走！（後書き）

なんとか脱走に成功し、ハルゲンファウスを抜けたキララ。抜けた先はすぐ人間界なのだが……？

次回、VOL・02：出会い

今作も、更新は毎週水曜の定期更新で行くつもりです。よかったら、感想などいただければ幸いです。では、また次回の更新で。

VOL・02：運命(?)の出会い

ハルゲンファウスから人間界へと抜けたキララは、そのまま飛んでいると地上の人間から発見されて騒ぎになってしまふと思い、“
バニス・ライトウン不可視魔法”を自らにかけて、姿を消しながら飛行を続けた。

「これでよし、と。落ち着くまでは見つかつて騒ぎになるのは避けたいしね。さて、どこに行こうかしら……？ 人間界って、意外と広いのね……」

世界中を飛び回りながら、適当な街を探していたキララだったが、海に浮かぶ弓状列島の上空を飛行していた、そのとき。突然彼女はガクツと身体力が抜ける感覚に襲われた。

「ヤバツ、飛行魔法は速度を上げればその分消耗も激しくなるんだった！ しかも不可視魔法も短時間ならともかく、今回はずっと使いつづけるから消耗の激しい魔法になるんだったわ……これは間違いなく魔力切れ、か……」

などと悠長に分析しているヒマもなく、不可視魔法の効果も消え、姿が見えるようになったキララの身体は、重力に従い垂直降下を始めた。

「くつ、このまま落ちるわけには……っ！ “レウィタス・ウイングム浮遊魔法”……！」

重力によってどんどん降下速度が上がる中、キララはなんとかならないかと魔力消費の少なめの浮遊魔法を唱えてみるが、もはやそれすらも発動しないほどにキララの魔力はスツカラカンになっていて、為す術なく、キララは墜落していった。

✦ ✦ ✦ ✦ ✦

「遼、またな」

「おう、俊、また明日な」

佐伯 遼は、しろやま城山市に住む高校2年生。同じ城山市内にある、私

立白稜ヶ丘学院高校からの帰り道、いつも一緒に帰ってる友人、川崎俊と十字路でそれぞれの家の方角へ別れ、1人家路を歩いていた。

「――！！」

と、そこに誰かの甲高い悲鳴らしき声が聞こえた、気がした。遼は発生源を確かめるため、立ち止まって辺りを見回したが、いま遼が歩いている道には他に誰の姿も見えず、静まり返っていた。悲鳴と思しき声もさっきの一度だけで、もう聞こえない。

「なんだっただ？ 気のせいかな？」

遼はもう一度辺りを見回してみるが、やはり誰もいない。気のせいということにして再び歩き出した直後、遼を影が覆った。

「ん？」

何かと思い遼が上を見上げた直後、顔面に何かやわらかいものが着地し、重みと衝撃に耐えきれず、遼はひっくり返るように転倒した。遼は起きあがろうとしたが、やわらかいものは彼の視界を塞いだまま退こうとしない。

「おい、誰だか知らねえけど、いつまでも乗っかってると重いからさっさと退いてくんねえか？」

遼は視界を塞がれて相手の顔も見えないし、起きあがることもままならないので、どうにか声を出して退くように要求した。

「うひゃあつ！ ゴメンナサイ！ し、失礼しました！」

慌てて上に乗っていたモノが飛び退き、遼はようやく相手の姿を確認した。落ちてきたのは、遼と同じか、少し年下か、というくらい少女だった。遼は高校2年にしては背が高く、すでに180センチを超えている。一方、男女で比べるのも無粋だが、落ちてきた少女はあまり背は高くなく、せいぜい150センチあるかどうかというところだった。

そんな具合に少女を観察していた遼だったが、いきなり顔面に着地してきておいて、ただ謝っただけで立ち去られてはたまらない。なぜ少女が上から落ちてきたのか気になった遼は、立ち上がって持

ち物を点検している少女に声をかけた。

「おい、あんた、いったい何者だ？ いきなり上から降ってきやがって……」

遼は点検を終えて立ち去ろうとした少女の腕を捕まえて問いかけた。

（うゝ、困ったなゝ、よりによって人の上に着地しちゃうなんて……魔力はカラだから、魔法で記憶を操作することはできないし……）
少女は黙り込んだまま答えず、どうしようかあれこれ思案していた。

「おい、無視か？ あんたは何者だつて聞いてるんだけど」

と、遼がしびれを切らしたのか、少し声を荒げて再び問いかけた。
「あたしの名前はキララ、キララ」シユプール。16歳よ。じゃつ、そういうことで！」

少女、キララは名前だけ名乗ると、逃げるように立ち去ろうとしたのだが、

「待てよ。あんた、すっげえ怪しいぞ。いきなり上空から落ちてくるわ、服がおかしいのはともかく、なんか服のポケットから光る棒が見えてるし、さらには逃げようとするなんて、怪しさ満点だな、うん。ついでに名前からして日本人じゃないな」

遼はキララの腕を離さずに引き戻し、さらなる説明を求めた。

（うゝゝ、この人、かなり怪しんでるよ……仕方ない、どうせこの人間界に行くところなんてないんだし、この人に世話になっちゃおうと）

キララは心の中でひとつの結論を出すと、

「わかりました。話す、話しますからそんなに強く腕を握りしめないでくださいゝ！ 折れちゃいますゝ！」

そう、遼はキララがあまりにも話そうとしないので、半ば脅しをかけるように腕を掴んだ手に力をこめて握りしめていたのだ。

「ようやく話してくれるのか。ったく、このまま立ち去られたら、気になって夜も寝れなくなるところだったぞ」

遼のグチは聞き流し、キララは話し始めることにした。

「えっと、あたしが何を言ってもすべて本当のことなので、笑わないでくださいね？」

そう前置きをしてから、キララはすべてを話した。

自身は魔法世界ハルゲンファウスからやってきた魔法使いなこと、行き先を適当に探していたら魔力が尽きてここに墜落したこと。かなり簡潔にはあるが、キララは遼に説明した。

「魔力が尽きた魔法使い……アホくさ」

遼のつぶやきは、信じていないと言うよりは、単純にバカにしているようにしか聞こえなかった。

「あつ、あなたいまバカにしましたね？ これでもあたし、向こうの世界じゃ通ってた学院史上最高の魔力を有する超優等生だったんですよ？」

キララは反論するが、魔力切れの現状では、魔法を見せてやることもできない。

「ふーん、優等生ね。そんな優等生がなんでわざわざこんなへんぴな街にやってきた上に、落ちてくるんだ？」

ニヤリと顔を歪めた遼の意地悪な質問にキララは黙り込むが、

「そういえば、あたしのことは話したのに、あなたのことはまだ聞いてなかったわ！」

ポンと手を叩いてキララは言う、形成逆転とばかりに遼に詰め寄った。

「んあ？ オレのことなんか聞いても面白くもなんともないだろうがな。まあ隠す理由もないか。オレの名は佐伯 遼、高校2年の17歳だ」

遼はボヤきつつも、意外とあっさり話したことにキララは拍子抜けしたが、

「同い年なんですネ。では、遼さん。何か飲むものを持ってないですか？ ハルゲンファウスの間人は、普段は寝ることで魔力を回復するのですが、もうひとつ、水分を摂取すると、その一部を魔力に

変換できるから、そうすることで魔法の実演とかもできるんですけど」

一応、まだ出会って十数分の初対面であることを考慮し、おそろおそろキララは遼にたずねてみた。

「飲み物、か。あいにく今は持つてねえな。まあいい、そこに自販機あつから好きなの選べ。面白そうだから奢つてやる。それにどうせあんた、この世界、この国の通貨なんて持つてないだろ？」

遼は制服のポケットから小銭を出すと、近くにあったジュースの自販機に入れて、キララに好きなものを選んでボタンを押せ、と促した。

「これが人間界にはたくさんあるという“じはんき”ですか。少しは勉強してましたが、本物を見たのは初めてです……んと、じゃあ、これにします」

キララが選んだのは、何の変哲もないただのオレンジジュースだった。ゴトツという音とともに出てきたジュースを遼に開けてもらつて飲み干すと、一瞬キララの体が淡い緑色に光った……ように見えた。

「ありがとうございます。少し魔力を補給できました。お礼に、遼さんをご自宅まで転送して差し上げますね」

キララはにつこりと笑つて遼に礼を言つと、纏っている上着のポケットから棒きれ——杖を取り出し、軽く振つてから先を遼に向けた。

それだけで遼の視界は一瞬暗くなり、気がつくとも自宅の玄関先で立ち尽くしていた。

（本物の魔法使い、ねえ。しかも別の世界からやってきたとか、まるでマンガだな。キララとか言つたっけ……アイツ、変なヤツだけど、面白いな。また、会えるかな？）

このとき、すでなキララがさつき心の中で考えていた大いなる作戦が進行していたことを、まだ遼は知る由もない——

VOL・02：運命(?)の出会い(後書き)

かくして2人は出会い、物語は静かに動き出す――

VOL・03：始まり

「ただいま」

キララの魔法で自宅前に転送されたあと、しばし立ち尽くしていた遼だったが、いつまでも突っ立っていても仕方ないので、家の中へ入った。すると、

「おかえり、遼」

いつもは帰りの遅い母親のみずきも珍しく早かったようで、夕食の支度をしていたのだろうか、台所からエプロン姿で顔だけ出して遼を迎えた。

「母さん、今日は珍しく早いんだな。あれ、もうメシの支度してるの？ 今日のメニューは？」

普段はみずきが遅いため、夕飯は遼が作ることが多いのだが、たまにみずきが早く帰るときはこうしてみずきが台所に立つ。これが当たり前の家庭なのだろうが、佐伯家では月に1回あるかどうかの光景だった。遼が階段を上がる前に台所に顔だけ突っ込んでみずきに訊ねると、

「ええ、今日は残業もないどころか、仕事そのものが早く終わったからね。夕飯はあんたの大好きな肉じゃがよ。もうすぐできるから、部屋にカバン置いて着替えてらっしゃい」

みずきは遼の問いかけに一旦肉じゃがの鍋の火を弱めてから振り向いて答えると、すぐに鍋に視線を戻した。それっきり黙って料理に集中し始めたので、遼は階段を上がって自室に向かったのだが、階段を上がりきったところでふと違和感がした。

（あれ、変だな。なんで空き部屋から人の気配が……？）

遼は一人っ子で、家の2階にある3つの部屋の1つを使い、あとの2つは何も置いてない空き部屋になっているのだが、その何もないはずの部屋の1つから人の気配がしていた。違和感がないほうがいい。

（まさか、泥棒……？ 母さんは結構のんびり屋だし、さつきまで料理に集中してたから、侵入されていても気づかなかったのかもしれないな。だけど、なんで何も無いはずの部屋に入ってるんだ？ なんにも無いはずなのに……）

遼がカバンを部屋に置くことも忘れ、あれこれ考えていると、ガチャリという音とともにドアが開き、その空き部屋から人影が飛び出してきた。

「怪しいヤツめっ！ お前は一体何者だっ！」

遼はとっさに持っていたカバンを振り回して謎の人影に威嚇攻撃を仕掛けた。しかし、

「わひゃっ！？」——ストップ・クロックカス
「時間停止」

人影は一瞬驚いたが、すぐに何かつぶやくと、遼のカバンが急停止し、遼が力を入れてもピクリとも動かなくなつた。

「なんだこりゃ！？ どうなってるやがる……って、お前は……！？」

遼は空中に停止したままのカバンを見て驚き、何かに気づいたのかようやく相手の顔をのぞき込むと、そこにいたのは、先ほど出会ったばかりの少女、キララだつた。

「全く、いきなり殴りかかるなんて酷くないですか？」

キララは頬を膨らまして言うと、魔法を解除し、カバンが床に落ちた。

「ああーっ！」

思わず遼はキララを指差して叫んでしまった。

「ちよつと、うるさいわよ、遼！ 何を騒いでるの！？」

あまりの叫び声に、階下からみずきが怒鳴つた。

「なんでも無いわ、おばさま。あたしが驚かしたらびっくりしすぎちゃったみたい」

キララを指差したままパクパクと口を動かすだけの遼に代わり、キララが階段の縁から身を乗り出して弁解した。

「ん、もう！ あんまりびっくりさせないでよね。キララちゃん、イタズラもほどにしなさいね」

みずきは階下からキララに伝えると、また台所に引っ込んだ。

「で？ これはどういうことなのか、きちんと説明してくれるんだろうな？」

着替えを済ませた遼がキララを自室に呼び、半ばにらみつけるようにしながらキララにたずねた。

「ええ、わかってますよ。まず、あたしがここに居るのは、あなたに正体を話した以上、あなたが口外しないか監視するため、つてのもあるけど、一番の理由は、違う世界から来たあたしにはこの世界では居場所なんてないんだから、ここに置いてもらってしばらく過ごそうかなって思ったの。あなたのお母さまがあたしを不審に思わないのは、もちろん魔法を使って記憶を操作して、あなたの従妹^{いとこ}っていうことにしたのよ。理解できた？」

キララは事情をまくし立てるように喋ると、ちゃんと理解したかたずねた。

「なるほど、だいたいわかった。行くところがないから偶然出会ったオレのどこに来て、魔法とやらで記憶をいじり、ついでに空き部屋を乗っ取った、と。そういうことだな？ ってか、口外しないか監視するとか言ってたけど、こんなこと誰かに話しても信じてくれるわけないだろうが。頭がイカれたヤツに見られるくらいで済めばいいけど、下手すれば即刻精神科に担ぎ込まれるわ」

遼は数回頷くと、ふと気づいたようにキララに突っ込んだ。

「まあ、そうでしょうけど、一応口止めはしておかないとならないですから」

キララは苦笑いしながら遼のツツコミをかわした。

「あ、そういえば、お前はなんでわざわざそのハルゲンなんとかって世界から出てきたんだ？ 学校じゃ優等生とか言ってたから、特別なかか？」

遼はあらかた事情を理解したところで、根本的な疑問が解決して

いないことに気づいてキララに訊ねた。

「あたしがハルゲンファウスから出てきた理由ですか？ 退屈だから、逃げてきたんですよ。学校は全寮制で外には出してくれないし、かといってあたしは優等生だから講義は退屈だしで、刺激を求めて脱走してきたつてとこね」

キララは胸を張って堂々と脱走してきたことを話した。

「脱走つて……じゃあ、今ごろ向こうじゃお前の心配してるか、それとも連れ戻すための作戦会議のどっちかじゃねーの？」

遼は予想外の答えに啞然としたが、ニヤリと笑いながらそんなことをのたまった。

「大丈夫よ。心配するような人はまずいないし、たとえ連れ戻しに来ようとも、あたしは負けない。いくらでも追い返してやるわ」

キララは自信に満ち溢れた表情で拳を握りしめながら言った。

「お前が向こうの世界の連中とドンパチやるのは勝手だけど、オレたちこっちの人間を巻き込むようなことだけはやめてくれよな」

遼はパタパタと手を振って呆れたようにキララに忠告した。

「わかってるわよ。少なくともあたしはしばらくこの人間界で暮らすんだから、居づらくなるようなことはしないわよ。じゃあ、あたし部屋に戻るわね」

キララはそう言って遼の部屋を出て行こうとした。と、

「あ、ちよつと待った。お前が魔法で記憶をいじったのはまだ家族だけだよな？ オレの友達とかはどうするつもりだ？」

遼が思い出したようにキララを呼び止めて訊くと、

「うん、まだ家族だけしかやってないよ。遼の友達とかまではまだ把握してないから。でも、それはどうにでもできるから、余計な心配はしなくていいの。あ、そうそう、記憶操作と言えば、お父様は？ 見当たらなかったから、特にまだ何もしてないんだけど」

キララは何かを企んでいそうな笑みを浮かべると、ふと思い出したように訊ねた。

「ああ、親父？ 単身赴任でここにはいないぞ。2ヶ月に1回帰っ

てくるくらいだな」

遼が父親はいないということを話すと、キララは分かったと言っ
て部屋から出て行ったのだった。

VOL・03：始まり（後書き）

かくして、キララの新生活は幕を開けた。

しかし、学則を破って脱走している以上、学院側が何もしないとは思えないが……？

次回、VOL・04：理事会と刺客登場（仮） 10/22 0

時更新予定です。

VOL・04：理事会と捜索隊の結成

その頃、ハルゲンファウス――

トラフェルス学院では、キララの脱走に対処するための、緊急理事会が招集されていた。

理事たちは全員学院の卒業生で、いずれ劣らぬ魔法の実力者ばかりが揃っているため、並の現役学生ではまず太刀打ちすることすらできない。ただひとり、今回の脱走者、キララ〓シユプールを除いては。

「ふーむ、まさかあの優等生のキララ君が脱走とはな。しかも行き先は人間界、か……。妙なことになるねばよいのじゃが……」

理事会を招集した理事長のハルカン〓カルータスが開始早々嘆き節を漏らした。

「むむむ、教師たちは何をやっていたんだ！　みすみす脱走を見過ごすなど、前代未聞の事態ではないか！」

などとぶつくさ言いながら怒りを露わにしているのは、理事のひとり、バストル〓メクホルン。理事の中では古株だが、実力、信頼どちらを取っても理事の中では低めな男だ。もちろん、理事をやっているだけあって、並の学生では太刀打ちできないのだが。

「まあまあ、落ち着いて、バストル。教師たちの話によると、キララは追跡した教師たちを振り切り、最後まで諦めなかった彼女の担任、ガランス〓ダンボルド先生を何の慈悲も見せずに風の魔法で打ち落としたらしいわ。吹き飛ばされて地面に背中を強打したガランス先生は全治1ヶ月の重傷。医師が3人がかりで治療魔法を全力でかけてもこれが限界とのことですから、元のダメージは推して知るべし、ですわ」

バストルをなだめつつ、現場から集めた情報を伝えたのは、マリス〓コステール。次期理事長との呼び声も高い、信頼に長けた女性である。

「皆様、この度は私の一人娘がご迷惑をおかけして、大変申し訳ありませんでした。責任を取って理事を辞任しないといけないかしら……」

半分泣きそうな声で他の理事に詫びを入れているのは、キララの母親、マリア・シュプール。キララの高い魔法能力は、母親からの遺伝で成り立っているようなものだった。というのも、マリアはハルゲンファウスの名門、マゴレット家の出身だった。このマゴレット家は、代々高い魔法能力を持ち、国家の高官などに登用されてきた歴史を誇っている。ちなみに、学院の現理事長、ハルカンの亡き妻マリードもマゴレット家の出身であり、マリアからみたら祖母にあたる人物だった。これほどの血筋に恵まれたキララは、優等生を約束された存在だったとも言える。

と、泣きそうな表情で狼狽えるばかりのマリアに対し、ハルカン理事長が口を開いた。

「マリア理事よ。今回のことは誰も予見できなかった事態だ。よつて、現時点で君が辞任する必要はない。だが、親として子の不始末は責任を取らねばならん。そこでだ、マリア理事。3日後に人間界へ出向き、キララ君を連れ戻すのだ。そのための手段は問わないが、あまり長く時間をかけるわけにも行かない。3ヶ月以内に彼女を見つけ出し、連れ戻せなければ、その時はキララ君を退学処分、及びマリア理事も解任とする、以上だ」

ハルカンの話が終わると、3人の理事が揃って疑問を投げかけた。「あの、なぜ3日後なのですか？ 今すぐにも向かえばいいのでは？」

異口同音に飛び出した質問に対し、

「いや、いくら親とはいえ、マリア理事1人では能力の高いキララ君を捕らえるのは困難を極めるだろう。なので、学生たちから有志を数名集め、チームで任務に当たってもらおうと言うわけで、3日間はその準備期間だ。わかってくれたかね？」

ハルカンはあごひげをさすって笑いながら3人の理事に告げた。

「それはわかりましたが、学生で大丈夫なのですか？ キララッシュ
ユプールは現役学生の中では最強の名を欲しいままにし、我々理事
にも匹敵する能力を誇っていたらしいではないですか。並の学生で
太刀打ちできるとは思えないので、我々理事3人で出向いたほうが
いいのではないですか？」

マリスがさらに質問を続けると、

「うむ、確かにキララ君は現役学生で最強だが、それは1対1で比
べた場合での話。個々のチカラではキララ君に分があっても、数人
を同時に相手にできるほど、戦闘での判断能力はまだ身についてい
ない。それに、指揮官は実の母親でもあるマリア理事だ。これなら
キララ君に勝ち目はないだろう」

ハルカンは一ヤリと笑いながら言うと、理事会を解散し、マリア
はその足で放送室へ行くために、会議室を出ていった。

「えー、全学生に学院理事、マリア・シユプールから通達します。
まず、この度は娘のキララがご迷惑をおかけしたこと、お詫び申し
上げます。私は親として、そして学院の理事として娘を連れ戻しに
行かねばなりません。しかし、皆さんも知つてのとおり、キララは
高い能力を誇り、1対1の戦いには無類の強さを誇るため、親の私
でも1人では厳しい任務になるでしょう。そこで、学生の皆さんに
お願いがあります。有志で私とともにあの子を捕まえる協力をして
ほしいのです。激しい戦闘が予想される危険な任務ですので、参加
してくれた学生には、魔法実技の単位を全て無条件で認定すると約
束します。協力してもいいという人は、放課後に会議室へ来てくだ
さい。できるだけ多いほうがいいですが、あまりに多い場合は、成
績などを考慮して、私と理事長で参加者を決めます。以上です」

マリアはマイクのスイッチを切ると、放送室を後にした。

この通達を聞いた学生たちはざわめいた。なぜなら単位が無条件

で認定されるからではなく、学院外に出ることはおるか、人間界に行くことといった、学則で禁じられていることを学院公認のできるからである。だが、その大半は学院最強との呼び声高い生徒であるキララを捕まえるという任務の危険さに考えが至って参加を断念していた。

だが、キララの幼なじみで、キララの脱走時に彼女を止めようとして魔法の餌食になったガレリア「グレインスはやる気に満ち溢れていた。

「俺は行くぞ。必ずキララを連れ戻す！ それに、やられっぱなしはイヤだからな」

そんな気合いのこもった言葉をクラスメートのサリー「ディスクー」に残すと、意気揚々と会議室に向かった。

「あら？ 意外と集まらなかったわね。全部で5人か。それじゃ、来た順番に所属クラスと名前をお願い」

マリアとしては単位をエサにすることでもっと希望者が殺到すると思っていたが、任務の危険性に大半が引いたらしく、会議室にやってきたのは男子4人と女子1人の計5人だけだった。

「うっす！ 2年B組、ガレリア「グレインスです。キララの幼なじみとして、アイツを連れ戻しに行きますっ！ よろしく願いますっ！」

先頭切って会議室に来ていたガレリアが自己紹介をし、

「3年A組、マリオ「ファクターです。よろしく願います」
続けてクールな青年が挨拶する。

「あつ、3年B組、クラウド「ファクターっす。マリオ兄さんの双子の弟として、コンビでがんばるッス！」

マリオとそっくりだけど、クールさは微塵も感じられない青年が挨拶をする、

「フン、1年D組、ロツクハートウエル。一度あの女とはガチでやり合ってみたかった。よろしく」

今までの優しいげな雰囲気を全く持たない、まるで全身から冷たい刃のような雰囲気をはじめさせている男が挨拶した。

「ええと、2年C組、ティアナアルペックスです！ 単位のために参加しましたっ！ よろしくお願いしまっす！」

と、ロツクが振りまいた重苦しい空気をぶち壊すように、元気な女生徒の挨拶が響いた。完全に単位が目当てと堂々と宣言したことに、マリアも他の参加者も苦笑するしかなかった。

5人の学生の自己紹介が済むと、マリアが口を開いた。

「それじゃ、出発は理事長から3日後って言われたけど、明日の朝に出発するから、朝8時、校門に集合すること。みんな、ゆっくり休んでね。わかってると思うけど、捕まえる相手はこの学院最強の学生よ。各々、気持ちで負けないように、しっかり準備しておいてね。それじゃ、解散！」

かくして、それぞれの想いを胸に、5人は寮へと帰っていった。

「ふう……正直ここ数年のあの子の成長には驚かされてばかりだね。元々能力は高いほうだったけど、学院の中等部に入ってから一気に能力を開花させたって感じよね。私でも勝てるかどうか……でも、彼ら5人と一緒なら、きっとなんとかなるわよね」

誰もいなくなった会議室に、マリアの独り言がこだましていた。

VOL・04：理事会と捜索隊の結成（後書き）

やる気だけはあるらしいガレリアだけど、1話目であなたキララに完膚なきまでにやられてたよね……？

大丈夫……？

ガレリア以外の4人も、ひと癖もふた癖もありそんな生徒ばかり。理事会が期待する連携プレーなんて取れるのだろうか……

次回、そんなギスギスしたハルゲンファウスをよそに、遼たちのある1日。

VOL・05：平和な日常（仮） 10/29 0時更新予定。

VOL・05：ある日、街中にて

その頃、トラフェルス学院がそんな事態になっているとは露ほども思っていないキララは――

「んっ、学院の束縛から解放されるのがこんなにも楽しいなんて、想像以上にサイコーの気分ねっ！　ね、遼」

買い物の袋をゆらゆらと振り回しながら、キララは遼とともに歩いていた。

「ん？　オレはそっちの学院とやらの様子は知らないからなんとも言いようがないけどな。しかし、今日はぜひぶん買い込んだな。ウチのどこにこんなお金があっただか」

着の身着のままハルゲンファウスを飛び出してきたキララには当然着替えなどあるはずもなく、また、遼は一人っ子で女の子の服なんて持っていないため、日曜日を利用して買い物に来ていた。

キララがどんな言い訳でみずきを納得させたのかはわからないが、2人が買い物に行くと言ったところ、みずきは資金として、10万円を手渡してくれたのだった。

そうして大量に買い込んだ荷物の大半をキララの魔法で転送し、少なめにした荷物を持った2人はのんびりと街を歩いていた。

遼は最初こそ空想の産物だと思っていた魔法の存在に驚いていたものの、キララがやってきて数日が過ぎた今では、まだ少し興味本位な部分は捨て切れしていないが、きちんとキララを従妹^{いとこ}として扱っていた。

「そういえばキララ、お前学校はどうするつもりだ？　オレと同年の従妹なら、通つてないと不自然じゃないか？」

そんな帰り道、ふと遼がキララに訊ねた。

「あ、うん。それは抜かりないわよ。明日から、遼のクラスに転入する手はずは整ってるわ」

ふふん、と大して成長の見られない貧相な胸を張ってキララは答えた。

「遼？ あなたいま何か失礼なこと考えなかった？」

キララが懐の杖を取りだそうとしながら、横目で遼を睨みつける
と、

「ん？ 気のせいだろ。それより、わかってると思うがこの世界は魔法なんてものは存在しないんだから、極力人前で使うなよ。こんな往来で杖を出すなんて論外だ。上手く服の中に隠しておけよ」

遼は話をはぐらかすと、念を押すようにキララに注意した。すると、

「うん、わかってるわよ。でも、私はこの世界の勉強は全くわからないから、それを理解するための補助に使うのは構わないでしょ？」

キララは例外を認めるように要求してきた。

「そういう例外うんぬんは置いて、オレが本当に言いたかったのは、多少のフォローはできても、完璧なものは期待するなつてこと。バレてもフォローしてくれるだろうからいいや、なんて考えを持つよりは、細心の注意を払って、極力バレないようにするのが一番だからな」

遼がキララを諭した、そのとき。

「何がバレちゃマズいの？」

何者かの声が響いた。

「その声は……いずみか。お前、どっから沸いて出たんだよ」

その声に遼が振り向くと、電柱の陰から茶髪ショートカットの少女が出てきた。

「やだな、あたしを虫とかみたいに言わないでよ。散歩に出たら、遼が見知らぬ可愛い女の子と楽しそうに歩いてるんだもん、幼なじみとしては気にならないはずないでしょ。で、その子は誰なの？」

茶髪の少女、いずみはケラケラと笑うと、遼に訊ねた。

「ああ、こいつはオレの従妹のキララだ。オレ自身も最近知ったんだが、外国で生まれ育って、諸々の事情で日本こっちで暮らすことになっ

たつてわけだ。キララ、この口やかましくて粗暴な女は、不本意ながらオレの幼なじみ、柳沢 やぎさわ いずみ——」

「誰がっ！　口やかましい、粗暴な女だってえ！？　しかも不本意ながらとか、どういう意味よっ！」

遼はキララにいずみの紹介をしようとしたが、途中でいずみの豪快なドロップキックが炸裂し、数メートルほどすっ飛んだ。

「いずみ……てめえ人が紹介してるときにドロップキックかますなんて、なんてことしやがんだ」

遼がふらふらと立ち上がって埃を払いながらいずみに文句を言う
と、

「あんな紹介されたら、あたしじゃなくたって怒るわよ！　何よ、
“不本意ながら幼なじみ”とか、“粗暴”とか、“口やかましい女”
だとか、とても初対面の子に対してする紹介とは思えないんだ
けど」

いずみは遼の文句などどこ吹く風でいまだに吼えていた。

「まあ、初っ端からあの紹介は間違っていたかもしれないが、それ
に対するツッコミでお前は自ら粗暴って点を認めたも同然だぞ。つ
いでに言えば、さっきからお前の声、響きすぎ。これで口やかまし
い女も肯定、と。これだけの条件があれば、幼なじみとして不本意
ってのもわかると思わないか？　なあ、キララ」

遼はニヤニヤと笑いながら、いずみの行動をひとつずつ挙げて、
自分の発言を肯定しようとした。

「あ、あはは……どうなんでしょうね」

急に話を振られたキララは苦笑いでごまかすことしかできなかった。
否定も肯定もしないその様子に、

「う、うう」

いずみはただ唸ることしかできなかった。

「……じゃあ、キララさんは明日からうちのクラスに転入してくる

んだ」

ひととおり落ち着きを取り戻したいずみは、細かい事情を聞いてうんうんと頷いた。

「そういうわけだ。じゃあ、オレたちはそろそろ帰るぜ。買い物荷物がなかなか重いからな」

遼はそう言つと、いずみと別れた。

「いずみさん、遼とはいつもあんな感じなの？」

いずみが見えなくなったところで、キララが遼に訊ねた。

「ああ、ガキのころからずっとあんな感じだ。クラスもずっと一緒に腐れ縁つてやつだな。だからこそ、女子のなかでは一番信頼してるんだが、こんなこと言つとアイツが調子に乗るから黙ってるよ」

遼は笑いながら言つたが、キララには黙ってるように念を押した。

「あ、そういえば……女子のほうでもキララをフォローするヤツが必要になるよな。トイレとか、更衣室でのことはオレじゃどうにもならんし。キララ、いずみに全て話してアイツにフォローしてもらうのでいいか？」

遼がふと気づいたことをキララに訊ねると、

「もちろん、いいよ。他に適任もないだろうし、私はいずみさんのこと結構いい人だと思うしね」

キララは笑顔で頷いた。

「じゃあ、一旦荷物を家に置いて、アイツを公園にでも呼び出すか」

遼はそう言つと、周囲に誰もいないのを確認して、キララの魔法でレポートし、その場から姿を消した。

VOL・06：新たな秘密共有者

30分後、遼とキララは公園でいずみを待っていた。

「まったく、なんなの？ 話があるんだったら、さっき会った時に済ませとけばよかったじゃないの」

いずみはぶつくさ文句を言いながらもちゃんと公園にやってきた。

「ああ、済まん。話ってのはほかでもない、ここにいるキララのことだ。さっき会った時は、オレの従妹だって説明したと思うが、アレは嘘なんだ」

遼は軽く謝ると、単刀直入に話を切り出した。

「え、嘘って？ じゃあ、キララさんはいつたいなんなの？」

いずみは呼び出しの時に詳しい内容を聞いていなかったの、どんな話なのか気になってはいたようで、遼が話を切り出すと、身を乗り出すように話に食いついた。

「ああ、その話をする前にひとつ言い忘れてた。これからオレが話すことは全部本当のことだから。信じられないかもしれないけど、ちゃんと最後まで聞いてくれ」

遼は話し始めようとしたが、ふと重要な注意を言い忘れていたことに気づき、話を中断した。

「もう、焦らさないでよ。とりあえず、話の内容を聞いてみないことには信じるも信じないもないわ。で、なんなの？」

いずみがだんだんイラついてきたように足で地面をトントン叩きながら、遼に話の続きを催促した。

「おっと、怒るなって。そんなんだから粗暴とか言われんだよ。ん、また話がそれるところだった。で、キララはオレの従妹なんかじゃなく、この世界とは別の世界からやってきた、魔法使いなんだ」

遼がいつものジョーク交じりにキララのことを話すと、いずみは遼に粗暴と言われた怒りも忘れて、ポカンとしていた。

「ゴメン、もう一回言って。キララさんはなんだって？」

聞き間違いかと思い、いずみは遼に聞き返すが、

「だから、ハルゲンなんとかっていう、オレたちの暮らすこの世界とは違う世界からやってきた、魔法使いなんだ」

遼は信じられなさそうないずみの表情を察し、ゆっくりと噛み砕くように説明してやった。

「……遼、悪いことは言わないわ、病院へ行きましょう」

だが、いずみは遼を頭がおかしくなってしまうたかわりそうな人扱いし、すぐにでも病院へ放り込もうと腕をつかんだ。

「待てって！ ああもう、キララ！ 適当に実演頼んだ！」

遼は引きずってでも連れていこうとするいずみを踏ん張って振りほどくと、少し離れたところに立っていたキララに声をかけた。

「オッケー、たぶんこうなると思って、準備はしといたから、すぐに行けるわ！ 行くわよ、“飛行魔法”^{フロイア}！」

キララはニヤツと笑うと、着ていた服から杖を取り出し、魔法を唱えた。

「えっ！？ ちょ、あ、きやああ！？」

すると、キララの身体はふわりと宙に浮かび、そのままいずみに近づくと、いずみも一緒に持ち上げて空中散歩に出かけてしまった。

「わっ、わっ、高い！ いやあああ！」

いずみはキララに抱きかかえられるようにして10数メートル上空で連れまわされていて、自身の体勢の不安定さに悲鳴をあげていた。

「わわっ、いずみさん、暴れないで！ 暴れたら落としちゃうわ！

仕方ないわね、もういつちょ、“飛行魔法”^{フロイア}！」

キララはなんとかいずみを抱きかかえていられたが、これ以上は無理と判断し、いずみにも飛行魔法をかけて、2人は空中で向かい合う形になった。

「なんかすごく変な感じ……地面があんなに下にあるなんて。でも、本物……なんだ。ひとまずわかったから、地面^{した}に降ろしてもら

える？」

いずみは上空に静止した格好で、空気を踏んで立っている感覚を味わっていたが、ひとしきり頷くと、キララにそう頼み、2人は地上に戻ってきた。

「これで信じただろ？」

いずみがちゃんと地面に着くなり、遼はいずみに訊ねた。

「ええ、さすがに自分であんな体験したら信じざるを得ないわ。ところでキララさん、他には何ができるの？ 火とか水とか出せたりするの？」

いずみはまるで童心に還ったように、目を輝かせてキララに質問を浴びせかけてた。

「結構いろんなことができるわよ。たとえば、さっきからずっとこの公園は人が近づかないように結界で覆ってあるし、火、水、雷、

氷、風だつたらどれでも自在に扱えるわ。たとえば火なら……“火^{フレイズ}・ボール”！」

キララは得意げな顔になって、あれこれ話し始めた。その過程で魔法を唱えると、杖の先に小さな火の玉が出現した。

「わっ、すごい！ あたし、小学生のころから魔法使いとかが出てくるファンタジーアニメやマンガとか、大好きだったんだ。まさか高校生になつて、本物と出会うなんて思わなかったわ……」

いずみはすっかりキララの魔法の虜になつたようにキララにいろんな魔法を見せて、とせがんでいた。

それからしばらくして。

「あ、そういえば、忘れるところだったわ。この話をあたしにして、どうするつもりだったの？」

いずみがハツと思い出したように、遼に真意を問うために話しかけた。

「ああ、そうだったな。キララは明日からオレたちのクラスに編入してくる、これは本当のことなんだが、いま説明したとおり、コイ

ツは別の世界からやってきたわけだから、当然この世界の常識とかには疎く、突然奇行を取ることもありえるってのはわかるな？　そこで、お前にはオレと一緒にコイツをフォローする役目を担ってほしいんだ。もちろん、普段はオレがなるべく見ていてやるようにするが、トイレや体育とかの着替えで更衣室を使う時なんかはオレは見ていてやるのができないからな。しかも、そういう場所こそ奇行を取るには絶好の場所。だから、誰か女子で最低でも1人以上、事情を知ってるやつがいてほしかったんだよ。オレの事をよく知っていて、なおかつ口が堅いお前にしか頼めないことなんだ、引き受けてくれるか？」

遼はいずみをまっすぐに見据え、事情をすべて話した上でフォロ役を頼みこんだ。

「そこまで話しといて、引き受けなかったら、重大な秘密を守るためにあたしの記憶を消すとかするんでしょ？　いいわよ、引き受けてあげる。面白そうだし、やっぱ記憶は消されたくないしね」

いずみは笑いながらも、しっかりと頷いた。

「ああ、ありがとう、いずみ」

遼はいずみに礼を言つと、キララに目くばせし、キララも言いたいことはわかっていたのか、すぐに頷くと、いずみを家まで転送させてあげ、帰宅するのだった。

VOL・07：キララ、学校へ

「それじゃあ、職員室はあつちだからな」

翌朝、遼とキララは一緒に登校し、昇降口を入ったところで別れた。

「うん、あとでね」

キララは頷くと、遼が向かった方とは逆の階段を上り、職員室へ向かった。

「遼、おはよう。なあ、聞いたか？ 今日からこのクラスに転入生が来るんだって」

遼が教室に入るなり、先に来ていた俊が近寄ってきた。

「ああ、知ってる。なんせオレの従妹だからな」

遼はなんでもないので俊に言っていると、教室内の野郎どもがざわめいた。

「遼、いま……転入生は従妹って言った？ 遼に同じ年の従妹なんていたっけ？」

俊は聞き間違いかと思い、もう一度確認するように聞き返すが、
「ああ、オレ自身つい数日前に知ったばかりだからな。お前らが知らなくても無理ねえよ。詳しい話はみっちゃんか本人からされるだろうけど、生まれてからずっと外国で育ってきてるから、一応日本国籍は持つてるけど名前が外国風なんだ。……って、なんでお前らそんなに複雑な表情してんだよ」

遼は机にカバンを置きながら、周りの野郎どもがうらやましそうな表情だったり、今にも殴りかからんばかりに憤怒の表情だったり、いろんな表情をしているのに気付いて訊ねた。

「最終確認だが、佐伯。その転入生は、お前と一緒に暮らしてたりは——しないよな？」

周りを固める野郎どもの1人が祈るようにそんな疑問を投げかけ

ると、

「ん？ 一緒に暮らしてるぞ。いろいろな事情でうちしか住むところがなかったからな。部屋も余ってたし、何も問題ない」

遼がこともなげに答えると、俊以外の野郎どもは希望が潰えたとばかりにガツクリとその場に崩れ落ちた。しかし、ただ1人、俊だけは――

「よしっ！ 遼！ 今夜から俺も泊めてくれ！」

俊は唐突に遼の肩をつかむと、とんでもないことを言い出した。

「なに馬鹿なこと言ってるやがる。来てももうお前の泊まる部屋なんかねえぞ。つーわけで、来・ん・な！」

遼は呆れたように俊を突き放すと、俊は「やだー、俺も女の子と一緒に寝泊まりしたいのー」などと駄々っ子のように床をごろごろ転げまわっていた。と、そこでようやくチャイムが鳴り、担任のみっちゃんこと、光本^{みつもと}が入ってきた。

「やつほー、みっちゃん。おはようっす」

クラスの面々が口々にみっちゃん、みっちゃんと挨拶をすると、「ほらほら、HR始めるわよ。そこで転げまわってる川崎くんはさつさと席に着きなさい。10秒以内に席に着かないと欠席にするわよ。っていうか、みっちゃんというのはやめなさいといつも言っているでしょう」

光本は呆れたように注意すると、俊にやんわりと脅しをかけ、さすがに俊も欠席扱いにされるのは困るので、素早く立ち上がって席に着いた。と言っても、遼の2つほど前の席と近い場所にいたので、すぐに席に着くことができた。

ちなみに、みっちゃんこと光本 ^{かずみ} 和美は、今年27になる遼たち2年1組の担任なのだが、初対面の人にはほぼ100%先生に見られたことがないほどの童顔なのだった。事実、春に赴任してきた日の朝、遼は廊下で光本とすれ違った際に職員室の場所を聞かれ、てっきり編入してきた生徒だと思った過去があったのだ。今ではいい笑い話になっているが。

「さて、と。たぶんある程度は知ってるだろうけど、今日からこのクラスに新しい仲間が加わることになったわ。それじゃ、入ってきなさい」

光本はさつと切り替えると、転入生がいると話し、入ってくるように促した。

「うおおおお！」

と、入ってきた転入生——キララがかなりの美少女に分類される容姿だったので、入ってきた瞬間に野郎どもの野太い歓声が響いたと、そのとき。野郎どもの歓声に驚いたのか、教壇に上がるうとしたキララが足を躓かせた。

「きゃあっ！」

ドタン！ という大きな音をたてて、キララは派手に転倒し、教壇に顔を強打した。その際、制服の内側に忍ばせていた杖が制服のブレザーの胸元から飛び出し、カラカラという音とともに転がっていった。

「あ……」

あまりに強烈な第一印象に、教室内が一瞬静まり返った。

「キララさん、大丈夫ですか？」

光本がハツとしてキララを助け起こすと、結構顔を強打した割には、どこも腫れたりしてなかった。

「じ、じゃあ、自己紹介をして。あと、はいこれ。なんだかよくわからないけど、学校に関係ないものは持ってきてちゃダメよ？」

気まずい雰囲気を打ち破るようにつとめて明るくふるまい、光本はキララが落した棒きれ——杖を拾って渡しながら、自己紹介をするよう促した。

「は、はい。皆さん、初めまして。キララ＝シユプールといいます。生まれてからずっと外国で暮らしていて、今回家庭の事情で初めて日本に来ました。この1週間ほどで、従兄であることを知らされた佐伯さんのおかげでだいぶ慣れてきましたが、まだ不慣れな点多いため、いろいろとご迷惑をおかけすることになると思いますが、

どうぞよろしく願います」

キララはあらかじめ遼といずみで作って暗唱しておいた自己紹介の文面をすらすらと読み上げた。

「とまあ、そういうわけなんだけど、家庭の事情というのは私も詳しく把握してゐるわけではないの、というより本人が話さない限りは詮索するな、との学長の通達です。当然、従兄であるらしい佐伯くんとの関係も本人たちから話さない限り、詮索は無用ということですよ。さすがに私はまだ職を失いたくはないので、頼みましたよ。それじゃ席は——やはり佐伯の隣がいいな。すみませんが、佐伯さんの隣から後ろにいる子たち、ひとつずつ後ろにずれてください。それじゃ、今朝は号令はなしで、もう終わりでいいわ」

いったい朝の職員会議でなにがあったのか、光本は少し疲れた顔で席の指示だけすると、さっさとHRを終わらせて、教室を出て行った。

昼休み、遼はキララ、いずみとともに屋上へ上がってきていた。

俊がいれば、俊も一緒に来たがっただろうが、いろいろと面倒なので、俊がトイレへ行っている間に逃げるように3人で屋上に来たのだ。

「キララさん、顔は大丈夫？」

いずみが今朝キララが強打した顔面の心配をして訊ねると、

「ええ、私たち魔法使いというのは、普段から身体の周りに、身を守る防御障壁を張っているんです。それのおかげで、今朝は助かりました。さすがにノーガードであれだけ強く打ってたら、ただじゃ済みませんからね」

キララは笑いながら話していた。

「で、午前中の授業を受けてみて、どうだったんだ？ こっちの世界の勉強は、向こうの優等生でも一筋縄じゃ行かないんじゃないか？」

遼がニヤニヤ笑いながらキララに訊ねると、

「そうですねー、確かにかなり難しいです。でも、こっそり魔法を使って理解力をあげてましたから、なんとかなるかな、ってところですね」

キララはいつの間にか魔法を使っていたらしく、そんなことをのたまった。と、そのとき。

「ああ、こんなとこにいた。遼、俺を置いて行くなんてひどくね？　いずみんにキララちゃんも一緒なのに、俺だけ仲間外れとか、何の陰謀だよ」

屋上の扉が開き、俊が現れた。どうやらずっと探しまわっていたらしく、少し息が乱れていた。

「あたしをいずみんって呼ぶなって言っただろうが」

いずみは俊の登場と発言に不機嫌になり、苦虫をかみつぶしたような顔で俊に文句を言った。

「つーか、いずみはともかく、キララがいるときに、下心まる見えのお前がいることほど危険なことはない。あえて置き去りにしたことからい察しろよ」

遼は言ってから少しして、しまった、と思ったがもう遅い。

「遼？　お前……あたしはともかく、ってどういう意味だコラア！」
遼の隣でいずみがこめかみに青筋を浮かべていた。

「わりいわりい、ちょっと口が滑った。でも、事実だろ？　いずみなら、たとえ俊に襲われても、返り討ちにしまっただろうし」

遼は軽く謝りつつも、本気で悪いとは思っていない口ぶりだった。
「いやまあそうかもしれないけど……でも、キララさんだって……いや、なんでもない」

おそらくいずみはキララには魔法があるんだから、と言いかけたのだろうが、その場にまだ秘密を知らない俊がいることを思い出して、曖昧に言葉を濁した。

「さて、と。そろそろ教室戻るか。昼休みも終わりそうだしな」

遼もいずみの言いたいことは想像ついたが、不用意にごまかすよ

うな発言をして俊に不審がられてはマズいので、いずみの発言は聞かなかったことにして、時計を見てみんなにそう告げた。

「そうね、そろそろ戻らないと、次の漢文のなっちゃん、来るのだけは異常に早いからね」

いずみも携帯で時間を確認すると、昼食の弁当を片付け、遼やキララと一緒に屋上を後にした。

「???」

ただ1人事情を知らない俊だけが、首をかしげ、そしてまたしても置いて行かれたことに気づき、あわててあとを追って教室へ戻って行った。

VOL・08：搜索隊、活動開始

一方、その頃――

「ここが人間界か。すごいな、見たことないものだらけだ」

ゲートを超えて人間界側に出てきたキララ搜索隊の6人。引率兼指揮官のマリアだけはまだ学生だったころの修学旅行と、新婚旅行で人間界を訪れたことがあるので特に感動などはなかったが、今回初めて人間界を訪れるガレリアたちは、上空から見下ろして、きゃっきゃつと騒いでいた。――ただ1人、ロックを除いては。

「はいはい、これは遊びじゃないのよ。3ヶ月以内にキララを見つけて出して学園に連れ戻さないと、キララは退学、私も理事を解任されて、君たちもすぐに向こうに戻ることになるわ。だけでもし、早めに事が片付いたら、私の監督のもと、少しでもなら人間界こうちを見て回ってもいいと理事長に許可を得ているわ。だから、人間界を見て回りたいなら、早くキララを見つけてきましょう」

マリアが少し呆れたようにはしゃぐロック以外の4人をたしなめつつも、ご褒美をちらつかせる発言をした。すると、

「なんだ、だったら話は早い。さっさと探しに行こうぜ」

はしゃぐ4人を尻目に周囲の様子を窺っていたロックが、ポツリと口を開いた。

「そうね。でも、私は昔人間界に来たことがあるんだけど、この世界、ハルゲンファウスと違ってものすごく広いのよ。だから、ある程度予測を付けて搜索に出ないと効率が悪く――」

マリアも分かっているようだが、人間界の広さにどうしようか迷っているように見えた。と、

「アイツの性格から考えて、魔力切れとかの事故でもない限り、発展している国の、人の多い所にいると思う。“木を隠すなら森の中”じゃないけど、魔法を使って人間の群れの中につまぐ潜んでいるんじゃないかな」

ガレリアがキララの性格を分析し、潜伏場所を推測しはじめた。
「えーと、じゃあ、どこから行く？ 私、いつか人間界に行きたい
と思って、通販で人間界観光ガイドを買って、持ってたんだ。これ
によると、この世界は国が200近くあって、全部で60億くらい
の人間がいるんだって。すごい数だね。でも、全部の地域に均等に
住んでるわけじゃなくて、たくさん人間が住んでいる国はホント
少ししかないみたい。ガレリア君の言ったことを信頼するなら、
“あめりか”ってとこと、“ちやいな”ってとこと、“じゃぱん”。
発展しているところなら“あめりか”と“じゃぱん”。人が多いと
ころなら、“あめりか”と“ちやいな”が当てはまるかな。他にも
人が多い国はあるけど、たぶん、今挙げた3つの国のどこかにいる
んじゃないかなと思うんだけど、どうかな？」

ティアナがカバンから出したのは、ハンディサイズの世界観光ガ
イドだった。それを見ながらガレリアの分析を手伝うようなことを
言っと、

「うーん、残念だけど、“あめりか”はハズレね。私たちがいまい
るのが、その“あめりか”、すなわちアメリカ合衆国の上空なのよ。
この世界の人間は魔力を持ってないから、あの子くらい高い魔力な
ら、なにもしてなくても感じ取りやすいはずだし、感知できる範囲
も、広いこの国を十分カバーしてるから、この国にはいないことが
わかるわ。ティアナさんとガレリア君の2人の分析を参考に、“ち
やいな”——中華人民共和国と“じゃぱん”——日本国のある地域
へ向かいましょう。そこで、私に考えがあるわ」

・ライトウン
ティアナは首を振ってアメリカの可能性を否定すると、5人に不可
視魔法を使うよう指示し、西へ飛び立った。
・ハニース

そして、白稜ヶ丘学院高校。

「じゃあ、次の問題を……よし、佐伯、佐伯 遼のほう、答えてみ

る」

とある授業にて、遼が当てられていた。だが……

「ZZZ……」

遼は苦手な数学で、授業開始早々、爆睡モードに入っていた。

「ちよつと、遼、当てられてるよ。起きなよ」

隣の席にいるキララが遼の肩をたたいたりつついたりしてみるのが、一向に遼が起きる気配はない。

「おい、佐伯ー？ ほほう、この渡井の授業で寝るとはな。なかなかいい度胸してるじゃないか。よろしい、そういう不届き者にはプレゼントだ」

担当講師の渡井^{わたい}は、遼が寝ているのを確認すると、教科書を持つてつかつかと近づいてきた。そして、遼の横に立つと、——ガツン！ という鈍い音とともに、教科書の角を振り下ろした。

「い……つてえ……！！」

さすがに角で殴られてはたまらず、遼は飛び起きた。本当は殴った相手に文句をつけたかったが、この渡井を相手にするのは分が悪いと、睨みつけるだけにした。

「ん？ なにかなその目は、佐伯 遼。授業中に寝るような不届き者には制裁を、それが私のルールだ。文句があるなら聞か？」

渡井が遼を見下ろしながら訊くと、

「なんでもねえ、と言いたいとこだけど、あえて聞きます。そうやって殴るのは体罰じゃないんですか」

まだ痛みが消えないのか、頭をさすりながら遼は渡井に訊いた。

「はは、体罰とは人聞きが悪い。私のコレは、いわば愛のムチだ。大切な授業中に寝ていて、成績が下がっては困るだろう？ それを防ぐため、私は叩くのだ。まあ、昔はもつと優しく肩を手で叩いて声をかける程度だったんだがな、それだと効果が薄いのでな、やむを得ず教科書^{コイツ}の角を使うことにしたのだ。わかってくれたかね？

ああ、このやり方はPTAにも認められてるから、訴えても効果はないと言っておく。では、あの問題を解いてみる」

渡井は自信に満ち溢れた顔で遼に言うと、前へ出て問題を解くよう命じた。

「……すいません、わかりません」

だが、当然寝ていた遼に解けるはずもなく、あえなく撃沈した遼は、廊下に立たされるハメになった。――両手にバケツを抱えて。

「まったく、いつの時代だよ……教科書の角で殴るわ、両手にバケツ抱えて廊下に立たせるとか」

放課後、遼は帰り仕度をしながら、一緒に帰る約束をしているキララ、いずみ、俊にグチをぶちまけていた。

「そうね、角はともかく、両手にバケツは危うく笑いそうになったわ。マンガの中だけだと思ってたのに、まさか現実でやるなんてね」
いずみは今さらおかしくなってきたのか、笑い出してしまった。

「まあ、渡井はもう定年近い年齢だから、行動が昔っぽくても仕方ないんじゃない？　ってか、アレはもう寝ていた遼が悪い」

俊は渡井の年齢から行動そのものは仕方ないと笑い飛ばしたが、はつきりと遼が悪いと断罪した。

「いやだつて仕方ないだろ？　自然に眠くなっちゃうんだから」
遼があせって言い訳すると、

「眠くても、耐えるのが当たり前なの。まったく、従妹のキララさんはこんなにも頑張っているのに、なんでかしらねー」

今度はいずみがぼつさりと切り捨てた上に、従妹として通しているキララと比較するようなことまで言い出した。

「うぐ……」

さすがに言葉に詰まる遼に、

「だったら、寝ないようにするのは完全に遼自身の努力だけど、もし寝ちゃったら、あたしが横からつついて起こすのはどう？」

キララがそう提案してきた。

「ああ、それいい！　キララさん、もし遼が寝てたら、思いっきり

やっちゃっていいからね」

遼は何も言わなかったが、いずみがノリノリで許可してしまった。
「うわ、それちょっと羨ましいな。そうだ、遼、席交換しない？
うぎゃっ！」

俊が案の定羨ましそうな表情をしたかと思うと、すぐさま遼に席交換の話を持ちかけたが、いずみが俊を張り倒して話を打ち切ったのだった。

VOL・09：「日常」が終わるのは突然に

その日も、遼は懲りずに授業中に居眠りをしていた。

「もう、遼ってば……また叩かれるよ？ 起きなよ」

横からキララが小声で呼びかけながら遼をつつくが、遼は完全に寝てしまっていて、全く反応を示さなかった。

「もう……あまりやりたくはなかったんだけどな……」

キララはふう、と溜息をつく、教師が黒板のほうを向いているのを見計らって懐から杖を取り出すと、先端を遼の方に向け、そつとつぶやいた。

バレイ・ウインダム
「――風弾」

すると、杖の先から空気の塊が射出され、机に突っ伏して眠る遼の腹部に直撃した。

「うぐっ！？ えっ、あ、のわああ！！」

遼は突然腹部を襲った強烈な衝撃に、奇声を上げて跳ね起き、さらにそのままイスから転落し、ガシャンと派手な音をさせた。突然遼が声を上げたので、何事かと教室内の視線が遼に集まっている間に、キララは杖を懐に隠した。

「佐伯、どうした？」

突然奇声を上げたかと思ったら、そのままイスから転げ落ちた遼を見て、教師が不思議そうに遼に訊いた。

「いえ、なんでもありません。ちょっと滑ってイスから落っこちちゃっただけです。すいません」

遼は腹部に感じた衝撃の正体はある程度予測がついたようで、適当にごまかすと、教師に授業を続けてくれと促した。

「さて……と」

午前の授業終了のチャイムが鳴り、昼休みに入ると同時に、遼は大仰に立ち上がると、こそそこそこかへ行こうとしていたキララを

捕まえた。

「ひゃうっ！」

いきなり首の後ろ側を掴まれたキララは奇声をあげて体をビクツとさせた。

「キララ、ちよつと話がある。屋上へ来い」

キララを掴んだ張本人、遼はそういうと、キララを引きずるように教室から出て行った。

「それで、どうしたの？」

屋上に出てきて、遼があたりに誰もいないか確認していると、キララが訊いてきた。

「どうしたもこうしたもない。お前、授業中オレになにしゃがった」
遼がこめかみをヒクつかせながらキララに訊ねると、

「ああ、あれ？ 寝ていた遼を起こそうと思って、空気の塊をぶつけたの。——この魔法で。バレイ・ウィングダム“風弾”」

キララは杖を取り出すと、先端を上に向けて魔法を唱えた。

「あー、なるほどね……って、納得してる場合かつ！ お前、教室あんなところで使うなんて、警戒心足りないんじゃないのか？ 寝ているオレを起こしてくれんなら、もつと普通に起こしてくれよ」

遼はキララの警戒心のなさにあきれたように言ったが、

「普通について起きなかったのは誰でしょうね？ ああでもしないとききそうになかったくらい、完全に寝ていた人には言われたくないです。それに、ちゃんと誰も見てないことを確認してますから、問題ありませんよーだ」

キララは拗ねてしまい、そのままぶいと振り向くと、屋上を後にした。

5時間目以降、キララは授業に姿を見せなかった。いずみに話を聞いたら、気分が悪い、と早退したらしい。気分が悪いから早退す

る、と切り出されたとき、キララはそんな様子は見せてなかったの
で、いずみには昼休みに屋上で何かあったと確信され、しつこく追
及された。やむを得ず、人気のない廊下に連れ出して事情を話すと、
「それはあんたが悪い。やり方はアレだけど、その前にちゃんと普
通の手段もやっている以上、それで起きないあんたが全面的に悪い」
いずみは遼のケツを蹴飛ばしながら断罪した。

放課後、いずみからは「ちゃんとキララさんに謝つときなさい」
と念を押されて教室から放り出された遼は、キララが忘れてった力
バンも持つて、とぼとぼと歩いていった。と、駅前に差し掛かった、
そのとき。

「……遼、か？」

自分を呼ぶ声に遼が振り向くと、そこには、単身赴任で遠くにい
るはずの父親、龍一郎りゅういちろうの姿があった。

「オヤジ！？ どうしたんだよ、今日帰ってくるなんて連絡してた
っけ？」

遼が驚いて訊ねると、

「いつもはちゃんと連絡してから帰るんだが、今回はちょっと急で
な。こっちにいられるのも今日から3日間だけなんだ」

龍一郎はそう言つて苦笑した。いつもは単身赴任先から帰ると、
だいたい1週間ほどこっちで過ごし、また戻っていくのだが、今回
は慌しいらしい。

「そうか。まあ、とにかく帰ろうぜ」

遼はそう言つて、龍一郎とともに歩きだした。

「どうだ？ 最近は」

龍一郎は遼と家路をたどりながら、親子らしい会話をしていた。

「そうだな……」

遼は少し考えて、キララのことを思い当つたが、彼女がやってき

たとき龍一郎は不在で、記憶操作がまだかかっていないので、あわてて思い直し、

「……特に変わったことはないな」と、ごまかしておいた。

「そうか。父さんはな、今まで営業所の副所長だったが、今度から所長に昇格だそうだ。それで、所長になると、今までより格段に忙しくなるから、昇格の前に少し休んでこいってことで、急遽帰ってきたってわけだ」

龍一郎は出世が決まったことを嬉しそうに話し、遼はその間に、キララに父親の龍一郎が帰ってきたことをメールで知らせていた。

「お、そうだ。遼、キララちゃんは元気か？」

もうすぐ家に着くというところで、龍一郎がいきなりキララの話を持ち出したので、遼はおそらくキララの記憶操作が効いたのだと判断し、

「ああ、有り余るくらい元気だよ」

少し呆れたような表情を見せながら遼は答えたところで、2人は家に着いた。

「あ、遼、それとおじさま、おかえりなさ——」

龍一郎が入ってきたのを見て、キララが出てきたが、おかえりと言いかけて固まった。

「キララ？ どうした？」

遼がキララの眼前で手をパタパタさせて意識があるか確かめると、いきなりキララはそんな遼の腕を掴んで、

「な、なんであの人がここに……？ ごめん、あとで話があるから部屋に行くね」

小声で遼に囁くと、そのまま踵を返して階段を駆け上がって行った。

「なんだ？ どうしたんだ、キララのやつ……？ それに、あいつ、

“なんであの人が”とか言ってたけど、どついう意味だ？”
遼はキララの様子を心配しつつ、彼女の言葉の意味に首をかしげるばかりだった。

同時刻、太平洋上――

「よし、このあたりでいいかしら。みんな、今から私が魔力を感知して光を放つ魔法を使うけど、キララの魔力を感知して光を放つても、数十秒で消えてしまうから、全方位、見逃さないようにしてね。行くわよ、グローン・ライトアップ“放光”！」

太平洋のど真ん中の上空で停止すると、マリアが空に向けて感知魔法を使った。すると――

「あつ！ あつちで光つてるわ！」

ティアナが指差した方向に巨大な光の柱が立ち上っていた。観光マップの地図で確認すると、そこは日本の“関東”と呼ばれる地域だった。

「みんな、あそこにキララはいるわ。さあ、行くわよ」

マリアは5人を先導し、再び飛び始めた。――目指すは彼らの現在地から真北、日本の関東地方――

再び同時刻、佐伯家2階、キララの部屋。

「なつ、なにこれ！？ 体が光ってる！ 天井を突き抜けて、空まで……ってことは、まさか、誰かあたしを連れ戻しに来てて、その誰かの搜索系の魔法が放たれていると考えるのが自然ね。あ、光が収まった」

いきなり自らの体が光りだしたときはさすがに焦ったキララだったが、冷静に考えてみると、魔法の力が働いていることは明白で、自分が脱走中の身であることを思い出すと、そういう結論しか出てこなかった。

(でも、いったい誰が来てるのかしら……?)

「キララ、さっき言っていた話ってなんだ？」

龍一郎が帰ってきたことと、昇進のお祝いで一家で寿司を食べに行き、帰ってきたあと、遼はキララを部屋に呼んだ。

「え、あ、うん。あのさ……おじさま——龍一郎さん、普通の人間ヒトだよな？」

キララが切り出した話に、遼はいきなり何を言い出すのかと首をひねるばかりだった。

「なんでだ？　そういやさっき、最初にお前がオヤジを見たとき、“なんであの人ここに”とか言ってたけど、何か知ってるのか？」

遼がさっきのキララの発言の真意を訊ねると、

「あれ、聞こえてたの？　実は、ずーっと昔、あたしが生まれるより10年くらい前、ハルゲンファウスでクーデター未遂事件があった、その犯人はちゃんと捕まったんだけど、その犯人グループが何者かに殺害されてしまった事件があったの。で、その容疑者として捕まったりユーン・サルファスって人と、あなたのお父さま、龍一郎さんの顔がうりふたつと言っても過言じゃないくらいそっくりだったのよ。あたしももちろん当時の様子を知ってるわけじゃなくて、授業中に当時のニュース映像を見ただけだから、勘違いだと思うんだけど……」

キララはさっき考えていたことを遼に話した。

「まさか、そんなことあるわけないよ。だって、もしその話が本当なら、オヤジはハルゲンファウス出身の魔法使いで、しかも大犯罪者ってことになるだろ？　犯罪者ってのはともかく、その実子であるオレはただの高校生だ。そんな、魔法なんて今まで見たことも聞いたことも——」

遼が否定すべくあれこれ理由づけていた、そのとき。

「そうか、そこのお嬢さんはやはりあっちの世界の人なのか……」

遼の部屋の前に、いつの間にか龍一郎が立っていた――

VOL・10：父親の過去

「オヤジ……！？　どういうことだ、キララを……いや、ハルゲンファウスを知ってるってのか？」

遼はいきなり龍一郎が現れたことで混乱してしまい、半ば掴みかかる勢いで訊ねた。

「ああ、知ってるも何も、私はもともとあっちの世界から来た、魔法使いだ。向こうでの名前は、リューンⅡサルファス。もつとも、こつちに来てからは全く使っていないが、な」

龍一郎は遼の腕を外しながら、こともなげに言つてのけたので、遼もキララも拍子抜けしてしまった。

「リ、リューンⅡサルファス！？　じ、じゃあ、あの事件の犯人の映像とおじさまが似ているのは、やつぱり……？」

そこでキララがハツとしたように龍一郎に過去の事件について訊ねると、

「まあ、世間的には私が犯人ということで落ち着いたようだが、もう25年も前のことだ、話してもいいだろう。あの事件の犯人は、私ではない。私ではないが、今でも誰が犯人だったのかわからない、迷宮入りの事件なのだ。私は事件後すぐに人間界へ追放されたから、その後の報道は知らないが、私への誤解が解けてないということは状況は何も変わってないってことだな」

龍一郎の言葉に、キララは首をかしげるばかりだったので、遼が代わりに詳細を訊ねると、

「うむ。あれは今から25年前のことだ——」

龍一郎は頷き、軽く咳払いをしてから話し始めた。

25年前のハルゲンファウス、セントラルシティ中央都市。龍一郎ことリューンⅡサルファスは、大統領直属の隠密部隊の隊長として、大統領の命を狙う刺客を排除する日々を送っていた。

「なに、クーデター？ 誰がそんなことを企ててるというのだ？」
ある日、リユーンのもとに、政府内でクーデターを引き起こして大統領を暗殺し、政権を奪おうとしている輩がいるとの情報が部下から入った。

「はい、ピエール」スイターをリーダーとする数名のグループです」

部下は、すでに名前まで調べ上げていたらしく、スラスラとリユーンに伝えていった。

「なるほど、しかし、実際に動かないと証拠はないのが実情である以上、我々は大統領を全力でお守りしつつ、そのクーデター計画も潰す、いいな」

リユーンは部下に指示を出し、自らも隠密部隊長としての職務のため、待機所を出た。

その後、ついにクーデターは実行に移されたが、リユーン達の活躍で大統領は無事、実行部隊であるピエールたちも追い詰めたのだが……

「さて、もはやこれまでだな、ピエール」スイターとその仲間たちよ。杖を捨てて大人しく投降すれば、罪が減免されることもあるだろう」

最後の抵抗とばかりに逃げ回るピエールたちを追い詰めた場所は、見晴らしのいい展望台の片隅にある、ほとんど人の近寄らない崖の上だった。

「くそっ……大統領は無能なくせして、部下は優秀だったってわけか。隠密隊のリユーン、だったか、あんだ、それだけ優秀なのに、なぜあんな無能な大統領の下で働いてられるのか、それが理解できねえ」

ピエールもさすがに諦めがついたか、仲間とともに杖をその場に投げ捨て、どっかりと座りこんで悪態をつきながらリユーンに問い

かけた。

「私は表舞台に立つのがあまり好きではない。それに、あの方を放つてはおけないものでね。さて、おしゃべりはもういいだろう。そのまま、動くなよ」

リユーンが理由を話し、ピエールたちを逮捕するため、ゆつくりと近づいた、そのとき。突如として崖が崩壊し、ピエールたちが巻き込まれた。

「なっ！？ レヴィタス・ウイングム 浮遊魔法！」

崖はあつという間に崩れ、ピエールたちは危うく転落しかけた。しかし、ギリギリのところではリユーンが魔法を発動させ、ピエール以下クーデター派5名を浮かせて救助し、無事に逮捕することができた。

「あれ、今のどこでオヤジが人殺しになる場面があった？　むしろ、人命救助して褒められるところじゃないのか？」

遼が訊ねると、

「まだこの話は終わりじゃない。最後まで聞きなさい」

龍一郎がたしなめ、再び話し始めた。

無事にピエールたちを逮捕し、クーデターは未然に防ぐことができた。ピエールたちは牢に入れられ、リユーンもいつもの職務に励んでいた。しかし、ある日ピエール以下5名全員、牢の中で全身血まみれで殺害されているのが見つかったのだ。牢は警察と政府関係者以外は立ち入ることができないので、徹底的にアリバイが調べられたが、ただ1人、リユーンだけが事件のあった時間に1人で仕事をしていたので、アリバイを証明できなかったのだ。それによってリユーンは無実を主張しながらも逮捕され、隠密部隊長解任と同時に、追放処分が決定されてしまった。

「なんだよそれ！？　たったそれだけのことで犯人認定で追放なん

て、あんまりじゃねえか」

話を聞き終えた遼が激怒するが、

「もう過去のことだから、いいんだ。それに、追放されて人間界^{こうち}へやってきたわけだが、正直これでよかったと思ってる。みずきと出会い、遼^{おまえ}という子宝にも恵まれたのだからな」

龍一郎は、軽く首を振って遼を黙らせると、満足げな顔をして、そう話したのだった。

一方その頃、キララの居場所を掴み、移動中のガレリアたちは――
「だいぶあの子の魔力も感じやすくなってきたわね。みんな、いつあの子を見つけてもすぐ捕まえられるように気持ちの準備はしておいてね」

日本列島の陸地が見えてきたところで、マリアが後ろにいるガレリアたちに声をかけた。

「はい。って、この魔力、キララさんのだよね？ まだ何もしてないのにこんなに感じるなんて……いったい戦闘状態に入ったらどうなるの……？」

ティアナがキララの魔力を感知し、通常時にも関わらず、プレッシャーを感じるほどの魔力に冷や汗が流れるのを感じていた。と、そのとき。

「ってか、普通にぶっ倒しちゃっていいんだろ？ だったら、この俺様1人で片づけてやるよ。ってことで、先行ってるぜっ！」

ロックが唐突に先頭に躍り出ると、突然のことにあ然とする残りの5人を置き去りにして、1人で飛び去ってしまった。

「い、行っちゃった……ッスね。オイラたちも早く追いかけた方がよくないッスか？」

いち早く自分を取り戻したクラウドの言葉で一様にハッとしたロックを除く一行は、先走ったロックを止めるため、再びキララのもとを目指し始めた。

VOL・11：捜索隊、接近す

ガレリアたち捜索隊がキララに接近しているころ、ハルゲンファ
ウス・中央都市——セントラルシティ

「なに、25年前の事件で新発見だつて？ 詳しい話を聞こうじゃないか」

執務室のイスに座りながら、25年前にリユーンを追放することを決めた副大統領で、現在大統領を務めるアundas「カーペントが入ってきた部下に言った。

「はい、当時はただ一人事件のアリバイがなかったリユーン」サルファス元隠密部隊長が犯人ということで解決させ、彼をハルゲンファウスから追放する決定が下されましたが、そもそもあの件でリユーン元隊長は本当に潔白だったのです」

鼻息も荒く入ってきた、かつてリユーンの部下だった壮年の男は、そう切り出した上で、25年の時を越えて明らかになった事件の真相を話し始めた。

ピエールたち5人が血まみれで殺害されているのが見つかった25年前のあの日、確かにリユーンは一人で仕事をしていたために、それを証明することができなかった上、他にアリバイのない人物がいなかったために犯人として、捕まってしまった。しかし、本当はもう一人だけアリバイのない、いや、アリバイはあるとされていたが、ウソの証言でアリバイを作っていた人物がいたのだ。

「ほう、それは誰なのかね？」

アundasが訊ねると、男は一呼吸置いてから、

「それは……あなたです。アundas大統領。当時副大統領だったあなたこそが、ピエールたちのクーデター計画の、真の黒幕だった。そして、計画がリユーン隊長率いる我ら隠密隊に潰されたあと、口封じのためにピエール以下実行犯5名を殺害し、自らは何食わぬ顔して周囲に金を握らせてウソのアリバイを証言させ、リユーン隊長

に罪を着せた。その時間はいつも一人で仕事をしている事を知っていたあなたしか、それが可能な人はいないんです」

男はつらそうな表情ながらも、ゆっくりとアンドスの犯行内容を指摘した。

「な、何を言うんだね、キミは。私が真犯人だという証拠はどこにあるんだね？」

アンドスはいきなりの指摘に多少動揺はしたようだが、男に対して証拠を見せろと詰め寄った。

「証拠、ですか。ええ、ちゃんと用意してますよ。おい、入ってきてくれ」

男がドアの外に呼びかけると、カチャリとドアを開けて、少女が一人入ってきた。

「その子は誰だね？ 誰かに似ているような気はするが」
アンドスが男に訊ねると、

「この子の顔を見て、誰だか分かりませんか、アンドスさん」
男は逆にアンドスに問いかけた。

「いや、わからんな」

アンドスは首を振って否定した。

「私は、サリー」デイスケージ。エド」デイスケージの娘、といえは分かりますか？」

サリーと名乗った少女が父親の名を告げると、アンドスの表情が変わった。

「エドの娘だと？ エドは元気なのか？ 20年ほど前に政府から去って行ったあと、消息不明になっていたが……」

アンドスは焦ったようにサリーに訊ねたが、

「父は、10年前から病に倒れ、そして先日亡くなりました。亡くなる直前、私に1通の封筒を遺して――」

サリーはそう言いながら、持っていたカバンの中から封筒を取り出し、男に渡した。中からは、結構な大金が出てきた。

「父は、そのお金は現大統領のアンドス氏から、とある件で口裏を

合わせるために受け取ったと言っていました。でも、本当はウソなどつきたくなかった、だからお金は全然使っていないだ、とも言っていました。そして、最後の遺言で私に、そのウソを暴き、無実の罪で追放された人を救ってやってほしい、と言いついて逝きました」

サリーがそう締めくくると、いよいよアンドスの顔は青ざめ、やがてゆっくりと崩れ落ちるように床に膝をついた。

「あいつには……いつも負け続けてきた。そして、立場的には私以上に上だったが、いつもどこか見下されてるような思いを抱かされてきた。今後もずっとあいつに見下されるくらいなら、いつそのこと……政府から追放されてしまえばいいと思ってたんだ……！」

アンドスは床を拳で叩きながら、ほぼ言い訳としか聞こえないような弁解をした。

「アンドス大統領、いや、アンドス＝カーペント。25年前のクーデター、およびピエールたち5人の殺害容疑で、逮捕する」

ハルゲンファウスには基本的に事件の時効は存在しない。いまここに、25年前の冤罪がひとつ晴らされたのだった。

事件の真犯人が捕まった、それはすなわちリユーンこと龍一郎の容疑が晴れたことを意味し、急きよ副大統領から昇格した新大統領の名前で、龍一郎に追放が取り消されたことを伝えることになり、それはアンドスを逮捕した男が行くことになった。

一方その頃、ガレリアたちは、勝手に先走ったロックを追いかけていた。

「まったく、タイムマン張ったらキララは学院最強だと言っておいたはずなのに……」

マリアが呆れたようにつぶやき、一行はキララの居場所目指して進んでいった。

そして、当のロックは、キララのいる佐伯家の上空にたどりついていた。

「ふん、人間などと仲良く戯れやがって……まずはこれでもくらいやがれ！」

ロックは窓の内側に見えるキララめがけて、凍結を弾丸のごとく
フリザール
発射した。

「ん、来ちゃったみたいね。って、いきなりぶっぱなすの！？ 伏せてっ！」

キララがロックの魔力を感じ取り、立ち上がった直後、氷の弾丸が窓を打ち抜いた。幸いにも、ギリギリで遼や龍一郎には伏せるよう指示したおかげで、2人ともケガはないようだ。

「来たって、向こうの追っ手か？」

遼が訊ねると、

「ええ。でも、一人で来ることは考えづらいから、おそらく集団から勝手に抜け出てきたってとこね。よほど自信があるのか、それともバカなのか。ともかく、あれをなんとかしてくるわね」

キララは相手の風貌から、同じ学生であると判断し、そんな推理をすると、壊された窓から飛び出していった。

「あんたがキララ・シュプールだな？ 俺様は学院の高等部1年、ロック・ハートウエル。脱走したあんたを連れ戻すため、あんたを倒しにきた」

ロックはキララが出てきて、同じ高さまで来たのを見ると、意外と律儀にも名乗りを上げた。

「なに、1年風情がこのあたしとタイマン張ろうって言うの？ いいわ、格の違いってものをその身に刻みつけてあげる！ でも、ここでドンパチやるのはさすがにまずいわ、場所を変えるわよ。着いてきなさい」

キララは人によっては悪役にも取られかねない発言をすると、飛び立った。

「どこで戦おうと俺様には関係ないね。好きな所を選びな」

ロックも一度杖をしまうと、キララの後を追って飛び立った。

キララが選んだのは、ちょっと広めの空き地だった。ロックが到着したのを確認すると、一般人が近づかないよう、結界を張った。

「さあ、はじめましょ」

キララが杖を構えると、その魔力が一気に高まり、並の魔力の持ち主なら倒れてしまいかねないほどのプレッシャーが立ち込める。

「ふん、さすがに最強と言われるだけはあるか。だが、ただ魔力が高いだけで俺様は倒せん！ “絶対防御”^{ストリック・ディファール}！」

ロックはキララの魔力を鼻で笑い飛ばすと、先手を取って魔法を使った。キララは聞いたことのない魔法に身構えたが、魔法によって現れた効果は、彼自身を守るように生成された、3つの黒い球だった。

「あたしもなめられたものね……それが何かは知らないけど、このあたしにたった一人で挑んできたことを後悔するといいわ！ “風^{ハレイ・ウィンドム}弾”！」

キララはこめかみに青筋を浮かべながら杖を振りかざし、叫ぶと、猛烈に圧縮された空気の弾丸がロックめがけて放たれた。しかし、
「そんな攻撃、俺様の絶対防御の前には無力だ！」

ロックが叫んだとおり、キララの風弾は、ロックに当たることなく、彼の周囲に生成されていた黒い球に吸い込まれて消えた。

「こいつは俺様に向けられた攻撃を感知し、すべて吸い込んで無効化する、究極まで防御に特化した、俺様のオリジナル魔法さ」

ロックは得意げな顔で、まさかという表情をしているキララに言い放ったのだった。

VOL・12：キララvsロック

「ウソ……！ あたしの“風弾”バレイ・ウイングダムを無効化するなんて……」

キララとしては、調子に乗っている1年坊主を最初の一撃で沈めるプランだったはずなのだが、それが崩され、驚きに震えながらつぶやいた。

「言っただろ、俺様のオリジナル魔法“絶対防御”ストリック・ディファール。物理的な攻撃だろうが、魔法だろうが、すべてを吸い込んで無効化する、俺様が最強の座に上り詰めるための布石のひとつさ」

ロックは学院最高の魔力を持つと言われてきたキララの攻撃魔法をも防いだことで自信を持ったのか、ペラペラと喋りはじめた。

「だったら……あんたなんかを使うのはもったいない気もするけど、あたしもオリジナルを見せてあげようじゃない。これをまともに食らって無傷だった相手は今までにいないわ。——荒れ狂う風よ、巻き起これ！ “烈風爆裂波”バーストウインド・ウイングダム」

キララは気持ちを切り替えて、次の攻撃に打って出た。脱走時にガランスを吹き飛ばしたオリジナル魔法をロックめがけて放つが、

「無駄無駄無駄あ！ 俺様の絶対防御は破れねえよ！」

ロックが自信満々に言い放ったとおり、決して威力が弱くはないはずのキララの烈風爆裂波は、絶対防御の黒い球に吸い込まれて消滅した。

「そんな、これすらもダメなんて……」

だんだん表情に焦りが見え始めたキララに対し、

「はん！ 学院史上最高の魔力とやらもこの程度なのか、これなら俺様が最強を名乗る日も近いかな。まあいい、ずっと防御してても詰まらんしな、いずれ最強の座を手にする俺様の攻撃、受けてみな！——蛇のごときしつこさに、焼き尽くされちまいな！ “火炎大蛇”アイス・オーロレス」

最初に絶対防御を使ってから何もしてこなかったロックがついに

攻撃に打って出た。彼の杖から放たれるは、燃え盛る炎の大蛇。巨大な炎の蛇が、その牙を剥いてキララに襲いかかる——しかし、
「なめるんじゃないわよ。こっちの攻撃がちよつと通らないからつて、調子に乗りすぎ。ところでその魔法は自分の放った魔法も防御できるのかしら？ あんたの魔法、そのままお返しするわ！」
「反射」

自分の攻撃が悉く無効化されても、キララはまだ冷静だった。ロツクが放った大蛇が自分を飲み込む直前、キララは魔法を唱えていた。

——その瞬間、キララを囲うように魔法を反射する鏡が張られ、大蛇が跳ね返された。

「くっ！ “火炎大蛇”！」

ロツクは跳ね返されるとは思ってたのか、自分に牙をむいた大蛇をもう一発同じ魔法を放って相殺した。

「ふーん、どうやら跳ね返された魔法は絶対防御の効果でも防御不可なようね。これで、あんたはあたしに負けないかもしれないけど、勝てもしない。あんたの攻撃は悉くあたしが反射するからね。このまま純粋な消耗戦やつてもいいけど、確実にあんたが不利。謝って降参するなら今のうちよ？」

キララは絶対防御の弱点に気づくと、ニヤリと笑って事実上の降伏勧告を出した。

「へっ、誰が降伏なんかするかってんだ。俺様にはまだ策は残ってるんだからなあ！ そのム力つく鏡、ぶっ壊してやんよ！」
「破壊の大槌」

ロツクが気丈に言い返し、魔法を唱えると、上空から巨大なハンマーが勢いよく落ちてきて、キララの反射鏡にぶつかり、粉々に破壊して消えた。

「見たか、俺様のパワー！ 反射できない、防御も到底できるようなものじゃねえ、このハンマー、もう1発受けてみる！」
「破壊の大槌」

すると、さつきと同じ、巨大なハンマーが今度は直接キララを叩き潰さんと襲いかかった。

「くっ！　なら、さつきと同じようにするっきゃないわね！　“反射”」

キララは押され気味の自分にイライラしつつも、まずは目先の危機を回避するため、自分の周囲に反射鏡を作り出した。直後、巨大なハンマーがそれを粉々に破壊して、消える。

「ふん、何発でも放ってやるよ。お前が潰されるまでな！」

ロツクはもはやキララを連れ戻すためというよりも、ただこのタイマン勝負に勝つただけに、さらに破壊の大槌を放とうとした。しかし、

「いつまでも、調子に乗ってるんじゃないわよ？　だったら、こういうのはどう？　――あなたの魔力、吸いつくしてあげるわ。風^{アフ}魔吸収”」
ソイマ・ウィンドム

キララはだんだんイライラが募ってきたのか、杖を数回振り回すと、別の魔法を唱えた。すると、紫色の風と霧が渦を巻くようにロツクを取り囲む。

「う、うおおおお！？　なんだ、力が抜ける！？」

ロツクはやがて浮いているのも維持できなくなったように、ゆっくりと地面に着地してへたり込んだ。同時に、絶対防御の黒い球も消滅した。

「ごちそうさま。あなたの残り魔力、ゼーんぶあたしが吸い取っちゃったわ。あんたを取り囲んだ紫色の風とともに発生させた霧、あれは魔力を吸い取る特殊な霧。それを応用して、竜巻状の風であんたの動きを封じて、霧で魔力をまとめて吸い取ったってわけ。回復するまでは何もできないわ。あなたの防御が働かなかったのは、この魔法はけして対象に攻撃する意図はない。その防御魔法は危害を加えてくる現象に対してのみ働くと思っていただけ、ビンゴでよかったわ」

キララがようやく本領発揮と言わんばかりに、満面の笑みでロツ

クに説明してやると、

「くっ、姑息なマネを……だが、詰めが甘いな」

ロツクはゆらりと立ち上がりながら懷に手を入れ、何かの容器を取り出し、中に詰まっていた液体を一気に飲み干した。

「なっ、まさかそれは……」

ロツクが飲んだ液体にキララが驚く間もなく、ロツクの身体が淡い緑色に輝いた。

「——そうさ、何かあった時のために1本だけ持っていた、回復薬さ。向こうでもかなりの貴重品だから、そうそう手に入るものじゃねえがな」

ロツクは空になった容器を再び懷にしまつと、杖を構えて、絶対防御を復活させた。

「もう薬は持つてないみたいだけど、たとえ何度回復されても、あたしはあんたの魔力を奪い取るだけよ。まあ、でもさすがにあんたの防御に負けっぱなしじゃ最強の名が泣くわね。いいわ、もうあんたの魔力を奪い取るのはなし。ふふっ、あたしの本氣にあなたの防御は耐えきれるかしらね？」

キララはクスクスと笑うと、集中力を高めていった。

「いかなる魔法だろうと、俺様の防御は破れねえ！」

ロツクは自分に自信があるのか、キララを止めようとはしなかった。しかし、行動や言葉とは裏腹に、その表情には不安から来る迷いがあった。

「あたしの攻撃系オリジナルはなにも烈風爆裂波だけじゃないわ。学生相手に使うのはこれが初めてよ、感謝しなさい！——火よ、

風よ、雷よ、水よ、氷よ、今こそ我が魔力で混じり合い、敵を討て！
クイーン・ス・プラス
“五種混合”」

キララの魔力があたりに満ち、ついにその魔法は放たれた。火柱、風弾、雷撃、水弾、そしてすべてを凍結させんとする冷氣、普通は混じり合うことのない5つの属性が、今、1つになってロツクに襲いかかる。しかし、キララが満を持して放った五種混合も、ロツク

の絶対防御に吸い込まれて消えた。

「わははは、残念だったな！　やはり俺様の防御の方が上だった！
最強の座を返上するならいまの――」

ロックが高笑いしながらキララに最強の座を譲り渡せと言いかけた、そのとき。ロックの周囲にある黒い球がドクンと脈打って収縮した。

「な、なんだ！？　う、うおお……！」

ロックは突然の事態に高笑いをやめ、状況を確認しようとした、次の瞬間。絶対防御の黒い球は大爆発を起こし、消滅した。

「誰の方が、上だって？　残念ね、吸いこんだはいいけれど、それを内部で消滅させるには、あなたの魔力では力不足だったみたいね。今までこれが完璧な防御だと思っていたのは、単にあたしほど強力な使い手とやり合ったことがなかっただけ。でも、あたしにここまでさせたのは、あなたが初めてよ。それは間違いないから、誇つていいわ。あたしにタイマンで挑んできたのはちょっと褒められた行為ではないけどね」

キララが爆発に巻き込まれて倒れたロックの実力を認め、笑顔を見せた。と、

「見つけたわよ、キララ。さあ、ハルゲンファウスに帰りましょう」
母親のマリアと、ガレリアたち搜索隊がその場に現れたのだった。

VOL・13：激突、キララvs搜索隊（前編）

キララとロックが激戦を繰り広げているところ、佐伯家では――

「あーあー、派手にやってくれちゃって……ガラス粉々じゃねえかよ」

遼が割れたガラスを掃除しながら、グチをこぼすと、

「遼。ここは私が片付けておくから、キララちゃんの様子を見に行つてやりなさい」

一旦階下に降りていたはずの龍一郎が遼の部屋に戻ってきて、そう告げた。

「え？ 様子を見に行つても、オレには何もできねえどころか、むしろ足手まといになりかねないだろ？ どうしろってんだよ」

遼は龍一郎の言葉の真意がつかめず、訊き返すと、

「大丈夫。お前は私の息子だぞ？ 今まで知らなかったとはいえ、ハルゲンファウスの魔法使いの血を引いているんだ。何かのきっかけさえあれば、魔法はきつと意識しなくても、使えるようになるはず。その時が来たら、これを使うといい」

龍一郎はそう言つて遼を励ますと、その手に持っていた、ちよつと太めの棒きれのようなものを遼に手渡した。

「これは……杖、か？」

遼がそれをまじまじと見ながら龍一郎に訊ねると、

「ああ、そうだ。それは、私が向こうにいたころ使っていたもので、もう私には必要ないものだろうから、お前に託す。さあ、行つてきなさい。おそらく、そろそろあのロックという少年側にも、仲間が駆け付けるころだろう。彼やキララちゃん、どちらでもない魔力が5つほど、2人のもとに接近しつつあるのが感じられるからな。あ、場所は近くの空き地にいるようだぞ」

龍一郎は大きく頷くと、キララとロックのタイマンの場に、応援が迫つてることを伝えた。

「ああ、わかった。正直今の状態では何の役にも立たないだろうが、とりあえず行ってくるわ」

遼は龍一郎から受け取った杖をジープンのベルトの隙間に挟むと、家を出て空き地へ向かった。途中、そっちへ行きたくないような妙な気分になりかけたが、それを振り払って空き地を目指すのだった。

「見つけたわよ、キララ。さあ、ハルゲンファウスに帰るわよ。ロツクは勝手に動いた罰で、あとで反省文提出ね」

ロツクとの一戦を終えた直後、キララの前にマリアたち搜索隊の面々が現れ、マリアがそう告げた。

「ちっ……せめて勝つてれば言い訳もできたが、負けちまったもんは仕方ねえな。とりあえず、しばらく休ませてくれ……」

ロツクはいったん顔をあげて苦々しげに言っていると、そのまま再び地に伏した。

「か、母さま！？　なんで母さまが……」

当のキララはまさか母親のマリアが現れるとは思ってなかったの
で、驚いて聞き返した。

「なんで？　そんなの決まってるでしょう。娘の不始末は親である私の責任。だから、理事長との話の結果、3ヶ月以内にあなたを連れ戻さないとならないのよ。もしできなかったら、私は理事を解任、あなたも学院を退学させられるの。わかったら、さっさと帰るわよ」
マリアがわかりきったことを訊くなどというような表情でキララに事情を話す。しかし、

「イヤよ。あたしはまだ帰らない。せつかく人間界こうちに出てきて、向こうでの認識を覆すような出会いを経験できているのに、たったこれだけでさよならなんてイヤ！　たとえ学院を退学になっても、あたしはこっちにいたい！　それを邪魔するんなら、たとえ母さまでも、あたしは戦って追い返すわ！」

キララは激昂して、自らの思いのたけを怒鳴り散らした。すると、

「聞きわけないこと言ってるんじゃないやねえよ、キララ」

キララを諭しかかったのは、幼なじみでもあるガレリアだった。彼としては、カッコよく出てきたつもりだったのだが、

「あれ、ガレリアじゃない。なんであんたがここに……ってか、あんたいたの？」

まるで彼の存在にいま気づいた、と言わんばかりのキララの態度に、ガレリアはガックリとうなだれ、ヘコんでしまった。

「マリア先生、こうなったら、力ずくでも連れて帰りましょう！」

私のオリジナルで捕獲してあげる！　チューバック・シーラー　円筒封印、キララⅡシユプール！　」

一気に臨戦態勢で飛び出してきたのは、搜索隊の生徒の中では紅一点のティアナ。ティアナは懷から、杖ではなく金属製の水筒を取り出し、魔法を唱えてキララの名を呼んだ。すると、ただの水筒だったはずのソレが、キララを吸い込もうとしはじめた。

「なっ！？　……なーんてね。それ、名を呼んだ対象を封じ込めるための魔法ね。残念だわ、もっとあなたの魔力が高ければ、あたしをも封じることができたかもしれないのにね。あなたとあたしとは、魔力ちからの差がありすぎるわ。その絶対的な魔力ちからの差、思い知るといいわ！」

キララは一瞬驚いた仕草を見せたが、それもほんの一瞬だけ。首を振って大げさに嘆くアクションを見せると、ニヤリと笑って指をパチンと鳴らした。

「きやあっ！？」

キララが指を鳴らした直後、キララを吸い込もうとしていた水筒が急にターゲットを変え、ティアナ自身に襲いかかった。ティアナは自分の魔法への対策など何一つしていなかったたので、なにもできないまま、水筒の中に吸い込まれて消えた。完全にティアナの姿が消えると、自動的に水筒のフタが閉じ、地面に転がった。

「ティアナさん！？」

マリアが水筒を拾い上げ、開け放とうとしたが、フタはきつく閉

まっついていて、ビクともしなかった。

「対象の動きを封じるタイプの魔法は、相手の力量を見切らないとこういう目に遭うのよ。まあ、そのままでいいけど、これだけ能力の差があれば、別に外に出てたつてなにも影響ないから、解放してあげるわ」

キララはめんどくさそうに言うと、マリアから水筒をひったくるように奪い、フタを開けた。すると、中に封じられていたティアナが光とともに出てきた。

「私を解放したこと、あとで絶対後悔させてやるわ……」

マリアに手を借りて立ち上がったティアナは、キララをにらみつけてそう言ったが、

「負け惜しみならいらないわよ。さあ、あたしを連れ戻すつもりなら、本気でかかってきなさいよね！ タイマンであたしに勝てないのはわかってるでしょ？ まあ、そこでぶっ倒れてるロツクは正直強かったわ。もし、彼を含めてみんなが一斉に攻撃してきたら、あたしでも負けてたかもね」

キララはよほど自信があるのか、5人全員を同時に挑発するといふ、傍から見たら無謀としか言いようのないことをやってのけた。と、そのとき。

「キララ、大丈夫かー？」

のんきな声を上げながら、遼が空き地の入口に現われた。

「遼！？ なんでここに！？ 並の人間が近づけない、結界を張っておいたのに……。いえ、そんなことはどうでもいいわね。いったい何しに来たの？ これはあたしがここに居続けるための戦いよ」

キララは遼の登場に驚いて、遼に駆け寄って訊ねた。

「え、ああ、来るつもりはなかったんだけどな、親父が様子を見てこいって言うもんだから。しかし、なんだこの押しつぶされそうな感じは……」

遼はキララに事情を話しつつも、あたりに立ち込める強烈なプレッシャーに脂汗をかいていた。

「キララ、その人は？ 誰かに似ているような気もするけど……」
2人のやりとりを見ていたマリアが、不思議そうな顔をして訊ねると、

「え？ ああ、この人は佐伯 遼さん。昔、冤罪でハルゲンファウスを追放された、リューン＝サルファスさんの一人息子よ」

キララが遼を紹介すると、一様に驚いた顔をした。

「あのリューン＝サルファスの息子！？ 追放決定後、行方知れずになったのは知ってたけど、まさかこの世界で暮らしていたなんて……」

中でも過去の事件を知っているとされるマリアが一番驚いていた。

「ということは、あんたはハーフなんだな？ ハルゲンファウスの魔法使いと、人間の」

ガレリアが遼に訊ねると、

「どうやらそういうことになるらしいな。一応、親父から昔親父が使ってた杖ってのを渡されてキララを助けてやれ、みたいなことを言われたけど、今まで何も知らなかったオレじゃ全く役に立たんからオレのことはいいないものと思ってくれ。勝手にドンパチャつてくれよ」

遼は龍一郎から受け取った杖を見せながらそう言ったが、杖を持つていても、使える魔法がない、と明言し、引き上げようとした。しかし、

「ふふつ、役に立たないなんてことはないわよ？ ただし、こつち側で役に立つてもらうわけだけだね！ “チューバック・シーラー円筒封印、サエキ＝リヨウ！」

ティアナが再び飛びだし、さっきキララに使って失敗した魔法を、今度は遼をターゲットに放った。

「ん？ え？ な、なんだ！？ 吸い……」

遼は自分の名を呼ばれたので振り向いた瞬間、目の前の少女が構えている水筒に吸い込まれてしまった。遼を吸い込んだ水筒はティ

アナの手によってそのままフタが閉められ、ティアナのカバンにしまわれたのだった。

「遼！」

キララの目の前でティアナの魔法によって捕えられ、水筒に封じ込められてしまった遼。無駄と分かっているにもかかわらず名前を呼ぶキララに
対し、

「私もあんまり人質を取るような真似はしたくないんだけどね、やっぱりこのままだと不利だし、どう？ この人間を解放する代わりに、素直に——」

遼の安全と引き替えにキララをハルゲンファウスに連れて帰ろうと、交渉を持ちかけようとしたティアナだったが、

「——許さない。この戦いに無関係な遼を巻き込んだこと、全力で後悔させてやるんだから。——凍てつく冷氣よ……」

キララは俯き、ボソボソとつぶやくと、魔法の詠唱を始めた。

「まずい！ みんな、上空に——」

マリアはキララが何をしようとしているのか察しがつき、全員空中に逃げるよう叫ぼうとしたが、

「遅いわ！ ——凍てつく冷氣よ、全てを凍りつかせよ！」
アイルード “大氷
原”——
オーロ・フリザー・フ

気づいたマリアさえも間に合わないほどの速度で放たれたキララの魔法は、空き地のほぼ全域を凍結させ、地面に足が付いていた5人全員の動きを封じたが、すでに戦える状態でないロックのいる場所だけは凍結せず、ロックはそのまま放置された。

「くっ……」

足を固められて動けない5人はなんとか抜け出そうとするが、がっちり凍りついていて、抜け出せる気配はなかった。

「負けを認めて、遼を解放すると同時に、連れ戻すのを諦めれば、解いてあげてもいいけど……？」

キララはそんな5人を眺めながら、逆に交渉を持ちかけるが、

「足を封じたくらいで勝った気になってもらっては困るね。正直、おれたち兄弟のオリジナルは破壊力が凄すぎて、同じ学生、しかも後輩に使う日が来るとは思ってなかったが、クラウド、アレ行くぞ、魔力率は50%だ！」

マリオは慌てずに杖を取り出すと、横にいるクラウドに言った。

「あいよ、兄さん！ オイラたち兄弟のオリジナル、受けてみるッス！」

クラウドも杖を構えて、2人で詠唱を始めた。

「——流れる星よ、我らの力に応え、今ここに落ちよ！」
シューテル・ステイム
パワー・レディファイファイ
魔力率、50%”！」

2人の詠唱が終わると、空がキラリと輝いて、キララめがけて隕石がひとつ、勢いよく降ってきた。

一方、水筒に吸い込まれた遼はというと——

「クソっ、なんなんだ、いったい……どうやって出りゃいいんだよ！」

すでに何回も上ろうとしたのか、あちこちにキズを作りつつ、遼はひとりごちる。ここまで何回落ちたか、もう数えるのも嫌になった。何回目か、かなり上まで行けたときには、いきなり全体が激しく揺れ、踏ん張りきれずに落っこちたのだ。遼は、まさかそれがキララの“大氷原”が放たれ、足を凍結させられて動揺したティアナが抜け出そうと暴れてる結果だとは知る由もない。

「……ん？」

ほとんど光のないこの空間の中で、何かが光ってるのに気づいた遼は、辺りを見回してみた。すると、光は龍一郎に託された杖から放たれていた。

「なんだ、この杖が光ってるのか？」

そう呟きながら、遼がジープンのベルトの隙間から杖を引っ張り出して握ると、光が一層強くなり、遼の頭の中に言葉が浮かんでき

た。

「何かのきつかけさえあれば、魔法はきつと意識しなくても、使えるようになるはず」

「これが魔法なのか、親父？　そういや、キララがこんなのを使ってたな。やってみつか！　バレイ・ウインダム“風弾”！」

遼は龍一郎の言葉を思い出し、杖を上に向けて頭の中に浮かんできた魔法を唱えてみた。

「ふん！」

キララは気合い一声、落ちてきた隕石を受け止めて威力を殺すと、そのまま地面に転がした。特別な魔法など使わず、元々張つてある障壁だけで受けきってしまったのだ。

「そんな、おれたち兄弟のオリジナルが……しかも、学院の修練場をぶつ壊しちまったのと同じだけの魔力を使ったのに、化け物か……！？」

とっておきの破壊力を誇りにしていたマリオとクラウドはそろって驚愕し、わなないた、そのとき。

「きゃっ！」

ティアナがいきなり悲鳴をあげた。思わず全員がそちらを見ると、ティアナのカバンの中から光が放出され、人影が飛び出した。

「あたた……出れた……のか？」

人影はもちろん遼で、凍結した地面にあおむけに倒れこむと、空を見てつぶやいた。

「遼！　どうやって出てこれたの！？　うつんそれより、ひどいケガ！」

キララは遼が自力で脱出してきたことにも驚いたが、遼が体のあちこちにケガをしていることに気づいて駆け寄った。

「よう、キララ。心配掛けたか？　こんなの、スリキズだから大した事ねえよ。やっぱり、オレはあの親父の息子なんだな。オレにも

魔法が使えたよ」

遼は杖を見せながら、キララに笑いかけた。

そのころ、龍一郎のもとにも来客があった。

「お久しぶりです、リユーン隊長。私のことを覚えておいでですか？」

佐伯家の呼び鈴を押し、龍一郎が出てくると同時に、そう切り出した男に対し、

「もちろんだ、グレッグ・ガイル。25年ぶりか、懐かしいな。それで、ハルゲンファウスにいるはずのキミがどうしてここに？」

龍一郎は男をグレッグと呼び、わざわざ訪ねて来た理由を訊ねた。「はい、25年前の事件で、隊長の濡れ衣は晴らされ、追放処分も取り消されました。そのことを伝えに参ったのです」

グレッグは敬礼したまま、ここに来た理由を話した。

「そうか……だが、私にはもうこちらで出会った妻も、そして生まれた息子もいる。当時私が使っていた杖は事情があって息子に託した。向こうに戻るかどうかは考えさせてくれ」

龍一郎はグレッグにそう伝えると、

「承知しました。隊長のおっしゃる事情というのは、この付近の空き地から感じられる魔力反応が関係しておられるのですね」

グレッグは改めて敬礼すると、そっちの様子を見てから帰る、と言いついて佐伯家を後にした。

「で、どうするの？ まだ続ける？」

キララは杖を構えた上で5人に問いかける。5人の足を固めていた氷は解いてあった。

「残念だけど、ちょっとこの状態では5人まとめてかかっても、あなたに勝つのは無理そうね。だけど、ここにとどまるのを許したわ

けじゃないから、必ず、あなたを連れ戻すためもう一度ここに来るわ」

足が自由になってるとはいえ、ティアナやマリオたち兄弟は自分らのオリジナルが破られたことにショックを受けていて、魔力はまだあるが戦意喪失、ガレリアは単身挑んだが、ことごとくキララに防がれ、やはり単独戦では無理だと戦いを放棄して座り込んだ。そんな4人の状態を見たマリアは、ため息をついて負けを認めた。

「帰ってくれる分にはいいんだけど、そんな状態で向こうへ帰れるの？　ね、遼……」

キララは現在が敵とはいえ同じ学院の仲間ということでも多少心配し、遼を見た。

「ああ、大丈夫だ。あと一部屋だけならあるから、男はそこに、女性にはキララと同じ部屋に泊まってもらえば、なんとかなるかな」

遼はキララの意図を察してやり、荒い息をしているロックを含めた6人に持ちかけた。

「……俺様たちは、魔力を持たず、魔法の使えない人間は、便利な力である魔法の存在を知ったら、必ず利用しようとする、そう教わってきたこともあって、この世界に住むお前たちを、ほとんど信頼してないも同然だ。それをいきなり優しくされて、信じてもいいものか……」

ようやくそれなりに動ける程度まで回復したロックが起き上がってきて、遼に訊ねた。

「何を心配しているのかオレにはわからないけど、大丈夫だ。まあ、あんたらの世界での教えは全て正しいわけじゃないけど、間違ってもいない。中にはそういう連中もいるってただだ。むしろオレが心配なのは、あんたたちこそ家の中でいきなりドンパチやらないか、ってことだ」

遼がロックの心配をやんわりと否定しつつ、「冗談混じりに話すと、さすがに私たちには今日のところはもう戦う魔力は残ってないわ。だから、休戦ってことにして、お言葉に甘えて一晩の宿を借りるわ」

マリアがそう申し出て、休戦の証として、遼と握手をした。と、そこへ――

「おや、そこにおられるのはやはりトラフェルス学院の方々でしたか。それと、リューン隊長の息子さんもいらっしやるようですね」
空き地の入口に男が現れて、一同に話しかけた。

「あんたは？ 親父の知り合いらしいのはわかるんだが」

唐突に現れた男に驚く一同の中で、龍一郎の昔の名前、リューンという単語に反応した遼が訊ねると、

「おっと、これは失礼。私はグレッグ・ガイル。ハルゲンファウス中央政府の隠密隊で副隊長を務めており、かつてあなたの父君の部下だった者です。ところで、学院の方々はなぜこちらに？ 私も学院の卒業ですが、学生が人間界（じうちう）に来るのは校則で禁じられていたと思うのですが……」

男、グレッグは自己紹介をし、マリアたちがここにいる理由を訊ねた。

「失礼、グレッグさん。話す少し長くなるので、場所を移しませんか？ 私たちはこれから遼さんの家で宿をとらせていただくので、そちらで話してもいいですか？ あ、遼さん、それでも大丈夫ですか？」

マリアは事情を説明するには疲労が溜まっているので、遼の許可が出れば、佐伯家で話をしたいと言いつ出した。

「大丈夫。いまさら1人や2人増えたところで、大して差はないし、それに、グレッグさんも親父と積もる話もあるでしょうから、家でゆっくり話しましょう」

遼も快諾し、計9人になった一同は、佐伯家へ向けて歩き出した。

VOL・15：それぞれの道

遼たち9人が帰宅すると、すでに龍一郎がみずきに全ての事情を話していたらしく、みずきは驚きつつも、みんなを受け入れ、居間へ通した。ただ、

「一応わたしも話は聞いたけど、正直理解の範囲を超えてるし、わたし自身は部外者ってことになるから、席を外すわ。あとは好きにやってちょうだい」

みずきはそれだけ言つと、さつさと居間を出て、夫婦の寝室へ引っこんでしまった。

「さて、と。とりあえず、さっきの戦いでそっちはかなり疲れてるみたいだし、休ませた方がいいな。ついてきな」

遼はとりあえず疲労しきったガレリアたちを2階にある空き部屋へ案内し、彼らを休ませることにした。

「済まないわね、キララが脱走してこなければ、こんなことに巻き込まれずに済んだでしょうに……。あら、キララは？」

ガレリアたちを休ませ、居間に戻ってきた遼に、マリアが話しかけると、

「別に。起こつちまつたことを後からどうこう言っても、何か変わるわけじゃないし。ああ、キララなら、彼らの様子を見るって言つて残りましたよ」

遼は首を振つてマリアに気にするな、ということアピールし、キララが上階に残^{うへ}つてることも伝えた。

「それで、私たちがこつちに出てきている理由、でしたわね？ グレグさん」

それぞれがひと段落したところで、マリアがグレグに問いかけた。

「ええ、学則が変わったわけではないですよね？」

グレッグが頷いて、思いついた可能性をひとつ、マリアに訊ねてみた。

「学則は変わってません。学生のうちは、基本的に外出禁止です。しかし、今回は私の娘、キララが脱走し、勝手に人間界こうちへ来てしまったので、それを連れ戻しに来たのです。ただ、キララは半端なく強力な魔力の持ち主で、親である私でも、1人では勝てないので、学生の有志を募って連れてきたのです。結果的にはそれでも勝てなかったわけですけど」

マリアはグレッグに事情を話しながら、自嘲するような笑みを浮かべた。

「そうでしたか。まさかあの学院を脱走する学生が現れるとは、なかなかやりますな」

グレッグはそれを聞いて目を見開いて驚いていた。と、そこにキララが2階から降りてきた。

「ふう、みんなを“催眠夢想”ドリモス・ヒューブンで寝かしつけてきたわ。しばらく眠れば、魔力も回復するでしょ」

キララはガレリアたちを半強制的に眠らせてきたことを話すと、椅子に座った。すると、

「とりあえず、キララのこととかは置いといて、あなたの今後について話す必要があるわね、遼くん」

マリアは横に座ったキララを放置し、反対側に座ってる遼に話があると言った。

「オレ？ あ、もしかして、さっき使った魔法のこと？」

遼は一瞬驚いたが、ふとさっきのことを思い出して、マリアに確認するように訊ねた。

「そう、その件についてなんだけど——」

マリアが頷いて話し始めようとしたのだが、

「なに！？ 遼、お前今の話は本当か！？」

話を聞いていた龍一郎が横から割り込んで、遼に訊ねた。

「あ、ああ。キララの様子を見に行っただけだけど、なんか変な魔

法で筒の中に閉じ込められちまって、そこから脱出しようとしている間に、オヤジからもらった杖が光ってて、手にした途端に本当に“バレイ・ウィングダム風弾”っていう魔法の名前が頭に浮かんで、それを唱えたら外に出れたってとこだな」

遼が龍一郎の剣幕に驚きつつも、その時の様子を説明してやると、龍一郎は何がそんなにうれしいのか、泣き出してしまった。

「それで、私からの話としては、ハルゲンファウスの魔法使いの血を引き、実際に魔法が使えることがわかった以上、遼くんにはせめて初等過程だけでもいいから、正式なカリキュラムを学んで、正しい使い方を覚えてほしいと思ってるの。遼くん、あなたは自分の力をどう考えてるかしら？」

マリアは龍一郎が話から離脱したのを受けて、遼に話を切り出した。

「正直な話、オレはまだ戸惑ってる。オヤジがそっちの人だったってのを知ったのすらい数時間前なわけだし、ましてやいきなり自分にもそんな力があるから、正しい使い方を学んでほしい、って言われても、どうしたらいいのか……。さっきは使えることに興奮してたけど、冷静になってみるとやっぱり戸惑いが先に来る、かな」

遼はやはり戸惑っているらしく、眉をハの字に下げてそうつぶやいた。

「私は行くべきだと思うぞ。使う、使わないにかかわらず、ちゃんとした使い方を学んでおいて損はないからな」

いつの間に泣きやんだのか、龍一郎が真面目な表情で遼に言った。「まあ、まだ回答を焦らなくていいわ。ただ、私としても、遼くんのお父様と同じ意見であることだけは伝えておくわ。さて、これできれい遼くんのほうはいいとして、問題はこっちな。キララ、改めて訊くわ。向こうに大人しく戻りましょう」

マリアは遼の方からキララの方に向き直ると、キララの目を見据えて再び訊ねた。

「イヤよ、帰らない……って言いたいところだけど、もし遼が魔法

の勉強をするために、ハルゲンファウスに来るのなら、帰ってもいい……かな」

キララは意外なことに、帰る可能性をにおわせ、てっきり拒否すると思っていたマリアは拍子抜けした。

「なんだそりゃ。オレ次第ってことなのか、キララ？」

自分の今後を考えていた遼は、いったん考えるのをやめてキララに訊ねると、キララは黙ってひとつ頷いた。

「キララ、遼くんの話と、あなたの話は全く別物よ？ 遼くんが来るか来ないかは自由だけど、あなたは必ず学院に戻らないとならないのよ？」

マリアが首をかしげてキララに訊ねる。

「別に、深い意味はないわよ。ただ、こっちで遼と一緒に過ごして、向こうより遥かに楽しかったから、向こうでも一緒に過ごせたら、って思っただけ」

キララは少し顔を赤らめながら理由を話した。

「そっか。まあ、お前にはお前の考えがあるんだろ。あ、ところでマリアさん。行くとすると、どのくらいの期間向こうで暮らすことになるんですか？」

遼はキララの答えにはさほど興味がないのか、軽く流すと、マリアに問いかけた。

「そうね、遼くんがどこまで学びたいかにもよるけれど、本当に基本のみで済ませる初等過程だけなら半年、少し応用も入ってくる中等過程までなら1年弱、キララたちと同じ高等課程まで学ぶのであれば、1年と数か月は最短でも必要ね。当然その間、こっちで通っている学校は休学ってことにしないとならないでしょうから、遼くん自身の判断に任せるわ」

マリアは少し考えて、遼の現時点の実力から、ほぼ1日中魔法関連の修行に充てた場合にそれぞれかかる期間をはじき出して、遼に伝えた。

「なるほど、わかりました。オレ、行きます。向こうに連れてって

ください」

遼はひとつ頷くと、マリアに対してそう告げた。

「わかったわ。学院への編入手続きとかは私が全部済ませて、1週間後に迎えに来るわ。遼くんはその間に、こっちの学校を休学する手続きと、友達とかへのしばしの別れをしておいてね。終わるまではこっちに帰ってこれなくなるから。キララ、あなたもきちんとお別れをしておきなさいね」

マリアが遼とキララに1週間後に迎えに来ることを告げると、どうやら2階の面々が目を覚ましたらしく、階段をドタドタと降りてきた。

「あ、起きたの？ 調子のほうはどう？」

マリアが降りてきた面々に訊ねると、

「もう完全回復といっても過言じゃないな。そうじゃ、キララ、リベンジマッチと行こうぜ」

ロックが首をコキコキ鳴らしながら、早くも臨戦態勢に入ろうとしていたので、

「待つて。もう、キララと戦って倒す必要はなくなったのよ。向こうに帰ることを了承してくれたから」

マリアが慌ててロックを止めに入り、事情を話すと、5人とも拍子抜けしたような表情をした。

「あれほど嫌がっていたのに、いったい俺たちが寝ている間に何があつたんだ……？」

ガレリアがボソツとつぶやくと、

「うるさいわね、帰るって言ってるんだからもう理由なんてどうだっていいでしょ。母さま、準備があるから向こうに先に向こうに戻るんでしょ？ うるさいから、ガレリアたちもさっさと連れて帰ってね」

キララはつつけんどんに言うつと、「あたしも疲れたから少し寝る」と言い残して階段が上がっていった。

「それじゃ、私たちはハルゲンファウスに——あ、そうだね。結構

早めに事が片付いたし、軽く世界を回ってみる？」

マリアはそんなキララに苦笑しつつ、ガレリアたちに出発の準備をするように言いかけて、約束のご褒美の話をした。すると、

「賛成！ よっしゃ、行こう！」

かねてより楽しみにしていた4人だけでなく、最初にご褒美の話をされたときは興味なさそうだったロツクも本音では楽しみだったらしく、5人は急いで出発の準備を整えて、玄関に戻ってきた。

「それじゃ、また1週間後に迎えに来るわね。お世話になったわ」
マリアたち6人はそれぞれに礼を言って、佐伯家を後にした。

その後、ガレリアたちは人間界のあちこちをひっそりと観光し、堪能した上で、ハルゲンファウスへと帰っていった。

月曜の朝、遼とキララは登校するなり、遼は休学の手続きを、キララは転校の手続きを取りに行った。遼の休学はともかく、キララはどこへ転校するわけでもないが、最初からいなかったことにするのは難しいので、転校という形で済ませることにしたのだ。キララは長居したくないのか、書類を渡すと早々に職員室を出て行った。

「そう、家庭の事情で佐伯遼のほうで休学、キララは転校か。まあ、細かいことは聞かないわ。校長にも余計な詮索は無用と言われてることだし」

それぞれの書類を担当の光本が受け取ると、その顔には理由を知りたいけれど詮索できない、彼女の葛藤がありありとうかがえた。

「ちよつと今回は訊かれても詳しいことは言えません。唯一言えるのは、オレの休学の理由は、のんびきならない事情で留学しないとならなくなった、ってことだけ。それ以上は言えないので、訊かないでもらえると助かります」

遼は苦笑して、言える部分だけを光本に伝えた。

「わかった。書類では休学は明日からになってるってことは、今日が最後なんだな？ クラスの連中くらいには、それなりに事情を話しておけよ」

光本は、いつもは見せない、先生らしい表情で、遼に伝えた。

「ええ、クラスの連中といえども、全部の事情を話せるわけじゃないけど、話せるところは話しますよ。じゃ、失礼します。またあとで、みっちゃん」

遼は少しおどけた感じで一礼すると、職員室を出て行った。

「ったく、みっちゃんはやめると言っただろうが……」

光本のつぶやきは当然ながら遼には聞こえなかった。

「遼！ あんた、休学ってどういうことよ！」

職員室から戻ってきた遼が教室に入るなり、いずみが全速力で駆けよってきた。

「ああ、いずみ、おはよう。休学の話は誰から……ああ、キララか。まあ、あいつから聞いたんなら話は早いな。理由は、キララのことをよく知ってるお前には話しても問題ないな。ちよつと、こっちにきてくれ」

遼は、駆け寄ってきたいずみを軽くいなすと、理由を話すために廊下の片隅に連れ出した。

「キララさんのことをよく知ってるあたしには話せる……ってことは、もしかして……？」

いずみは遼の前置きからひとつの可能性を思いついたようだが、口には出さずに止めた。

「ああ、そうだ。この週末、いろいろあつてな、キララを連れ戻すために向こうの世界から刺客がやってきたり、オヤジがキララと同じ世界の生まれだつてことが判明したりで、騒がしかったんだ。その中で、そんなオヤジの息子であるオレも、魔法の素質みたいなものがあるってわかり、きちんと使い方を学んでほしいっていうから、休学することになったんだ。キララはそれで向こうの世界へ行くオレと一緒に帰ることも決まったから、オレとキララは今日でひとまずお別れだ。もっとも、キララは元々あつちの世界の人間だから、もうこっちに来ることはないだろうけど」

遼がすべての事情をいずみに話すと、案の定、いずみはポカンとしていた。

「そうなんだ……このことは、俊には伝えたの？」

いずみが沈んだ表情で訊ねると、

「いや、まだだ。まあ、どっちにしろ、細かい事情を話せるのはいいずみ、お前だけだから。他のヤツには単に事情があつて留学することになったから、こっちを休学する、くらいしか話せないし」

遼は首を振った。

「いきなりすぎて、頭がついていけないけど、とりあえずはわかったわ。それで、どのくらいで帰ってこれるの？」

いずみは苦笑しながらも、遼に再び訊ねた。

「どうせなら徹底的にやってくるつもりでいるから、相当長い期間こつちを離れることになる。オレにこの話をしてくれた人によれば、今のオレの実力だと、1年以上かかるらしい。なるべく早く帰ってくるつもりではいるけれど、オレが帰ってきて復学する頃には、いずみや俊たちはもう卒業してるかもな」

遼はどうやら高等課程まで修行してくる決意を固めていたらしい。「そつかあ……あたしには遼を止める権利なんかないし、止めても無駄でしょ？ あたし、先に教室戻るね」

いずみは少し残念そうにつぶやくと、遼に背中を向けてその場を離れた。

「なんだよ、特別留学って……遼、そんなのに選ばれるほど成績よくないよな？」

朝のHRで光本が遼の休学とキララの転校の話をし、休学の理由を特別留学、と話したために、HR終了後、俊が訊ねてきたのだ。

「急に決まったことで、成績とかは関係ないらしい。英語とかの成績とは関係ない場所だからな、留学先は。必要がないからこれ以上は話さん」

遼は光本の話に合わせてウソの話を俊に伝えたが、面倒なので適当なところで打ち切った。

「そうか。まあ、詮索するなってことか。だが、お前の方はそれでよくても、なんでキララちゃんはこんな短い期間でまた転校しちゃうのか、納得いかん」

俊はやけにあっさり身を引いたと思ったら、拳を握り締めて悔しげに吠えた。見ると、他の男子たちも同じようなことをしていた。

「いろいろあるんだから、うだうだ言ってもしょうがないだろ」
遼は呆れたように俊たちにつぶやいた。

そんな最後の日もあつという間に時間は過ぎ、帰りのHRの時間。
「それじゃ、これで今日は終わりだな。んじゃ、あとは柳沢と川崎、
お前らが仕切ってくれ」

光本はいつもの伝達事項を言い終わると、いずみと俊を前に呼んでバトンタッチした。

「今日はなんかあつたっけか？」

もう終わりで帰るだけだと思っていた遼が俊たちに訊ねると、

「遼、お前なあ……留学するお前と、転校してしまうキララちゃんの送別会に決まってるだろうが」

俊が半ばあきれたように遼に説明してやると、

「そうだったのか。わざわざ、済まねえな」

遼は納得したのか、俊に軽く礼を言つて再び席に着いた。

「それじゃ、こういう場での定番、旅立つ両名から一言頼むわ。まずは遼、あんたから」

いずみが場を仕切り、遼とキララを教壇に呼んで、一言みんなに言うように促した。

「お、おい。オレがこういうの苦手なの、ずっと一緒のクラスだったお前なら知ってるはずだろ。なんでわざわざ苦手なものやらせるんだよ」

遼は事前の情報なしでいきなり送別会を開かれただけでも驚いたのに、さらに一言求められ、狼狽していずみに食って掛かった。すると、

「あんたね、少なくとも1年は留学するんでしょ？ そんな長旅への旅立ちなのに、クラスメートに別れも告げないで行くつもりだったの？ いくらこのクラスになってまだ数カ月とはいえ、そんなの認められるわけないでしょ。ほら、観念しなさい」

いずみもまた呆れたように遼を咎め、改めてみんなのほうを向かせてしゃべるように促した。

「わーったよ。まあ、その、なんだ。ちょっと急に決まっちゃった留学で、ロクに別れも言えないけど、ちよっくら行ってくる。なるべく早く帰ってくるつもりでいるからさ。わりいけど、これで勘弁な。やっぱこういうのは苦手なんだよ」

遼は諦めてごく簡単な別れの挨拶をした。

「ま、仕方ないわね。じゃあ、次はキララちゃん、頼んだわ」

いずみは嘆息すると、キララに話を振った。

「あ、うん。えっと、皆さん、本当に短い間でしたが、ありがとうございました。もしまたこの街を訪れることがあったら、きつここに遊びに来ますね」

キララは10日もこの学校に通えなかったが、クラスメートたちに感謝を伝えて、挨拶を終えた。

「じゃ、みんなから2人に言いたいことはある？」

2人の挨拶が終わったところで、いずみがクラスメートたちを見渡して訊ねると、

「俺からいいか？ 遼、俺はお前と親友でよかった。留学先でも元気でやれよな。あと、たまには連絡しろ。お前は意外とものぐさだから、言つとかないと絶対連絡しねえからな。毎日連絡しろとはさすがに言わん。そんなに連絡されても逆にこっちが困るからな。けど、最低でも月に1回は連絡しろよな」

「俊…… お前と親友でよかったと思ってるのはオレもだ。ああ、できるだけ連絡はするように心がけるよ」

俊が遼に想いを告げ、2人は親友同士肩を抱き合った。

結局、俊以外に遼やキララに何か言いたいというクラスメートはいないようで、2人の送別会は幕を閉じた。送別会らしく、遼とキララを先に教室から送り出そうという流れになり、2人が教室を出

ようとした、そのとき。

『遼！ それと、キララちゃん！ 元気でな！』

クラスメート全員の声がハモって、2人の背中を押した。

「みんな、サンキュ！ んじゃ、行ってくるぜ！」

「ありがとう、皆さん。本当に、ありがとうございました！」

遼とキララ、それぞれにクラスメートに礼を言って、学校を後にした。

VOL・17：旅立ちの日

いずみや俊たちクラスメートにしばしの別れを告げた遼は、これからの新生活に向けて、旅立ちの荷物をまとめ始めていた。

「そうだ、キララ。ちょっと聞きたいんだけど、向こうってコレ使えるのか？」

遼は手に持った携帯電話を指して、キララに訊ねた。

「うーん、前例がないからわからないけど、たぶんその気になれば、すぐに使えるようにしてくれると思うわよ」

キララは首をかしげてそう答えた。

「そうか。じゃあ、一応持っていくか。キララはもう荷物まとめたのか？」

遼は充電器と一緒に携帯電話をカバンのサイドポケットにしまうと、キララに訊ねた。

「うん。もともとあたしはほとんど何も持たずにこっちへ来てるから、こっちで買ってもらった服くらいしか持って帰るものもないしね」

キララはそう言つと、彼女の荷物が詰まった、足元の小さなカバンを持ち上げて見せた。

「そついやそうだったな。お前、最初にオレと会ったときは着ていた服と、杖しか持ってなかったものな」

遼はつい10日ほど前のことなのに、懐かしい気持ちになりながらつぶやき、自らも荷物を大きなカバンに詰め込んでいった。

そして、6日後。約束どおり、マリアが再び佐伯家を訪れ、遼とキララを迎えに来た。

「遼くん、それとキララ。準備はできてる？」

チャイムを鳴らして、玄関先に出てきた2人に、マリアは静かに訊ねた。

「ええ、大丈夫ですよ」

遼は力強く頷いたが、

「ところで、母さま？ 遼はまだ飛行魔法フロイアが使えないけど、どうやって向こうへ連れて行くの？ ゲートは空の上なのに……」

キララは遼の心配をして、マリアに訊ねると、

「心配はいらないわ。遼くん、家の中に大きな鏡はあるかしら？」

マリアはそんなキララをよそに、遼に鏡があるか訊ねた。

「ええ、ありますけど、それがどうかしたんですか？」

遼は頷いたが、マリアの意図がわからず首をかしげた。すると、

「なるほど、鏡を利用した簡易ゲートですか」

そう言つて家の奥から出てきたのは、3日間の休暇を終えて赴任先に戻つたはずの龍一郎だった。

「オヤジ！？ なんでここに？ 赴任先に戻つたんじゃなかったのか？」

遼が驚いて龍一郎に訊ねると、

「なに、ちよつと私も追放が解かれたことだし、25年ぶりに向こうへ行くつもりでな。一度は仕事に戻つたが、昨日の夜、再び休暇をもらつてとんぼ返りしてきたんだ。帰ってきたのはお前が寝た後、真夜中だったからな。気づかなくて当たり前だ」

龍一郎は遼の肩をポンポンと叩きながら笑つてみせた。

「ちよつと話はそれたみたいだけど、リユーンさんの言うとおり、鏡を利用した簡易ゲートを作つて、移動するわ。これなら、まだ魔法の使えない遼くんでも問題なく移動できるし、私たち自身の姿を見られずに済むっていうメリットもあるわ」

マリアがそう言つと、

「ああ、すいませんですが今の私はもうリユーン＝サルファスではなく、佐伯 龍一郎という、この街に暮らすただの人間なので、できればリユーンと呼ぶのはなしにしてもらえませんか」

龍一郎がマリアに注文をつけた。

「そうですね、失礼しましたわ。では、龍一郎さん、そろそろ……」

「ええ、では、鏡は奥にありますのでどうぞ。遼とキララちゃんも荷物を持ってついてきなさい」

マリアはすぐに謝って、移動しようとする旨を伝えると、龍一郎も頷いて、マリアを奥に通し、遼とキララもその後が続いた。

「ここです」

龍一郎が足を止めたところは、1階の一番奥にある、ほとんど使わないものが入っている、物置部屋だった。

「遼、済まんが奥にある姿見を引っ張り出すのを手伝ってくれ」

龍一郎は遼を呼んで物置に入って行き、少し奥にある大きな姿見を2人がかりで前のほうに引きずり出した。

「こんなもん、うちにあつたのか……」

遼は自分の背丈よりも大きな姿見に見入っていた。

「ああ、元々はみずきの実家にあつたものらしいんだが、お前の祖父母にあたる、みずきの父や母が亡くなり、実家に取り壊されるときに、みずきが持ってきたんだ。思い出の品らしいんだが、結局使うこともないまま、物置にしまわれてたってわけだ」

龍一郎もその姿見を見上げ、懐かしそうに遼に昔のことを話した。

「そうか、やっぱりずいぶんホコリかぶってるな……」

遼が鏡についたホコリを払うと、

「それじゃ、この鏡で簡易ゲートを開くわ。——異界の扉、今ここに開かれん。オーバーゲルテン“開扉”」

マリアが物置に入ってきて、鏡に杖を当て、魔法を唱えた。すると、鏡が光を放ち、それまで前に立っていた遼やマリアを映していた鏡が、どこともしれない景色に変わった。よく見ると、何かの建物も見えていた。

「この向こうがハルゲンファウス……なのか？」

遼が鏡の中を指差して訊ねると、

「ええ、そうよ。そこに見える建物が、キララたちが通う、トラフェルス学院。遼くんもここへ編入してもらうけど、普通にやったら時間がかかってしまうから、魔法に関する基礎だけ学んだらあとはひたすら実技訓練をやってもらうわ。朝から晩まで、ビシバシしごくから、覚悟しといてね」

マリアはにつこり笑って、遼に今後の予定を話した。

「あ、あはは……」

遼はそれなりに覚悟していたこととはいえ、やはり直に「スパルタ特訓」宣言をされてしまったのもあって、乾いた笑いしか出てこなかった。

「あ、そうそう。遼くん、杖は？」

ゲートをくぐろうとしたところで、ふとマリアが遼に訊ねた。

「杖って、オヤジの？ それなら、ここに」

遼が首を傾げながら龍一郎から渡された杖を取り出すと、

「向こうでちゃんと使う人に合わせて、専用の杖を作ってもらえるから、借り物の杖を持っている必要はもうないわ。親子だから先日は上手くいったんでしょけど、普通は他人の杖って上手く扱えないのよ。それに、龍一郎さんも向こうに行けばまた必要になるでしょうし、その杖は返しても大丈夫よ」

マリアはそう言って微笑んだ。

「そうですか、わかりました。はい、オヤジ。ありがとうな」

遼は頷くと、龍一郎に杖を渡し、4人はゲートを超えてハルゲンファウスに移動した。

「じゃあ、私は中央都市^{セントラルシティ}へ行く。一応、追放処分を取り消してくれた現大統領や、あとはかつて隠密部隊で行動を共にした同僚たちにも挨拶くらいはしておかないといけないからな。じゃあ、遼。元気でやれよ」

龍一郎はゲートをくぐってハルゲンファウスに出てすぐ、そう言っ
て遼たちと別れることにした。

「ああ、元気でな、オヤジ。帰るときには、オヤジを驚かせるくらい成長してるつもりだから、さ」

遼もそう応じ、父子のしばしの別れに、2人は軽く抱き合ったのだった。

VOL・18：エピソード

遼がハルゲンファウスにやってきて、3ヶ月が過ぎた。

白稜ヶ丘学院にいたときは、あまり勉強が得意ではなく、成績も下から数えた方が早い遼だったが、ハルゲンファウスに来てわずか1週間で基礎をすべて覚え、マリアを相手に実技の修行に入ったのだが、当のマリアさえも驚くほどのスピードで、めきめきと力を付けていた。

「——じゃあ、徹底的にやっちゃっていいんだな？」

今日の修行はキララとの実戦形式の1対1タイムバトルだった。遼がマリアにそう確認するように訊ねると、

「ちよつと、遼、調子に乗るんじゃないわよ。確かに遼はこっちに来てからすごい勢いで強くなってるけど、このあたし相手に、まともには戦えると思ってるの？ 今のあなたなら、あたしは6割も力を出せば勝てるわ」

そこにキララが割って入り、遼に詰め寄った。

「ちよつとキララは黙ってて。ええ、いいわ。遼くん、確かにキミは強くなってるけど、まだキララには全力で挑んでも勝てるとは思えないわ。だから、何も考えないで、ただ自分のベストを尽くせばいいわ」

マリアはキララを一言で黙らせると、遼にそう言い聞かせた。

「やっぱまだキララにや勝てそうもないか。まあいい、オレはオレなりにベストを尽くすだけ。それじゃ、始めようぜ」

互いにある程度の距離を置いて立ち、それぞれに杖を構えた。

「それじゃあ、はじめっ！」

マリアの開戦の合図と同時に、キララが先制攻撃をしかけた。

「遼、行くわよ！ あんたにこれが防げるかしら！？ “凍結の矢”！」

キララは杖を縦一文字に構え、片手で中心付近を握ると、杖を弓矢に見立て、触れたものを瞬時に凍結させるほどの冷気を圧縮して、遼に放った。

「おお、怖い怖い。んなもん、まともに受けたら一撃で戦闘不能にされちまうな。けど、このくらいガードしきれなくちゃ、ここまで学んできた意味がないってものよ。」
スティーレ・ウォルス “鋼鉄壁”」

キララの勢いに、遼は少しだけおどけてみせる余裕さえ見せ、早くも編み出した、オリジナル独自魔法でガードを固めた。直後、キララの放った凍結の矢が鋼鉄の壁に激突し、壁の表面を凍結させたが、壁は壊れることなく、その場に残った。

「え、ウソっ！？ あたし、6割どころか、念には念を押して8割くらいの力で放った攻撃だったのよ？ それを、完璧に防いだって言うの……？」

キララの思惑としては、先制の一撃で、たとえ遼が防御したとしても、それをぶち抜いて決める予定だったのが、あっさり覆され、驚くほかなかった。

「それじゃ、今度はこっちから行け。つつても、おそらく普通に習うようなレベルの攻撃魔法じゃ、キララは倒せないだろうな」

遼は杖を構えたまま、ポツリとそうつぶやいた。

「そうね。普通に習うようなレベルの魔法なんかで、あたしを倒せる人がいたら、ぜひ戦ってみたいと思うわ。で、どうするの？」

キララは相変わらず平坦なままの胸を張って、自信満々に答えてから、遼に訊ねた。

「こら、遼。またあなた失礼なこと考えたでしょ」

「まあ、それは置いといて、だ。別にオレはお前を倒すことを諦めたわけじゃない。ただ、並のレベルの魔法ではダメだろ、ってことを確認しただけだ」

遼はキララのツツコミを華麗にスルーすると、ニヤリと笑ってキララに告げた。

「なんか、その言い方だと、並のレベルじゃない魔法を習得してま

す、みたいに聞こえるんだけど……？」

キララが訝しげな視線を遼に向けながら問いかけると、

「ああ、その通りだ。受けてみる、これが今のオレの全力だ！」
ブロック・ストンディ
閉塞の流砂”」

遼が魔法を唱えてキララの足元に杖を向けると、彼女を中心に半径2メートルほどのエリアの土が軟らかい砂状に変化し、さらに流砂のごとく彼女を沈め始めた。

「遼、あなた、このあたしをなめてるわね？　あたしの攻撃を1回防いだくらいで調子に乗ってると、痛い目見るわよ。この程度の魔法であたしを倒すなんて、夢物語にしか聞こえないわよ」

キララは、余裕しゃくしゃくといった表情で、流砂から抜け出すために、足を動かそうとし始めた。

「甘いな、キララ。そいつはただの流砂じゃねえ。自分の足元、よく見てみな」

そんなキララを見て、遼はそう忠告した。

「えっ……な、なに、これ！？　ネバネバして足が動かない!？」

キララが足元を見ると、流砂に飲み込まれた部分が正体不明の粘液に覆われ、周りの砂とくっついて、非常に動かしにくい状態になっていた。

「それは魔法で作り出した、空気に触れると粘性の増す液体。流砂にハマったやつ動きを封じるために、独自に組み合わせたものさ。オレが魔法を解除するか、倒して気を失わせない限り、そのネバネバは消えないぜ。どうだい、ギブアップするか？」

遼はまだ攻撃系の魔法はそれほど得意ではないらしく、相手を傷つけずに済むものなら、なるべくそうしたいという思いがあるようだった。

「遼、あなたやっぱりまだ攻撃魔法は口々に習得してないのね。前に言ったでしょ、傷つけずに戦うなんて、そんなの無理だ、って。今回、あたしは本気であなたを敵だと思って戦ってたわ。それは、さっきあなたが防いだ、あたしの攻撃にも表れてる。それなのに、

あなたはまだ相手を傷つけないというの？ そんな甘いこと言ってるうちは、あたしどころか、他の学院生にも勝てやしないわ。この状態でも、あたしは勝てるわ。遼、これで終わりよ。——荒れ狂う風よ、巻き起これ！ “バーストゥン・ウインダム 烈風爆裂波”！”

流砂にひざ上まで飲み込まれつつも、キララは相手を傷つけることを嫌う遼に怒りをあらわにし、強力な風を巻き起こした。遼の前にはまだ先ほどの鋼鉄壁が残っていたが、1秒も保たず、壁は吹き飛ばされて消滅し、ほぼそのままの威力で、遼に直撃した。

「うわああああ！」

ノーガードでキララの強力なオリジナル魔法を受けては、ひとたまりもない。遼はあえなくその場に倒れ、流砂も消滅した。

「ふう、正直危なかったわ。まさかあたしが本気になったときにしか使わない“烈風爆裂波”まで使わせるなんてね。ホント、強くなつたわ。これで、遼が本気になって攻撃系の魔法を習得したら、あたしにとっては脅威になるかも……”

キララのつぶやきは、当然ながら気絶している遼には聞こえなかった。

——夜。

「うーん、やっぱり傷つけないなんて言ってられないかあ。まあ、習得しても、使い時を誤らなければいい、って基礎講義で言ってたしな……”

目を覚ました遼は、今日の修行を終わりにして、寮の自室で考えていた。と、そこに窓から手紙が舞い込んできた。

「お、いずみからか。なんて書いてあるんだろ……”

遼はここへ来たばかりの時に、携帯は使えないのか、と聞いて、使えないなら使えるようにしてくれ、と頼んだが、あっさり無理だと断られていた。しかし、代わりに手紙のやりとりは自由にできるようにしてくれていた。遼の部屋から手紙を投げれば、すぐに人間

界の宛先に届き、逆に人間界側からも、ポストに入れた瞬間にハルゲンファウスの遼の自室に到着するということにしてくれていた。今回届いた手紙は、いずみかららしい。遼は手紙の封を切ると、読んでみた。

「遼、久しぶりね。そっちの生活はどう？ まあ、あんたのことだから、ホームシックとかはありえないだろうけど、慣れないことばかりで不安でしょうね。こっちは相変わらずよ。俊がバカやって、あたしやみっちゃんがどついて、そんな変わらない毎日。ただ、ここにあんただけがいない。だから、ちょっと寂しいかな。じゃあ、またね。返事待つてるわよ　いずみ」

遼は手紙を読み終えると、知らず知らず涙を流していた。と、そこにドアをノックする音がしたので、遼は慌てて涙をぬぐって、ドアを開けた。

「遼、体は大丈夫？　いくら手加減なしでやり合えるとはいえ、ちよつとやりすぎちゃったかも、って心配で見に来たの。……　って、遼、泣いてた？」

やってきたのはキララだった。どうやら、昼間のことを心配して来てみたらしいのだが、遼の目が赤いのに気づいて、訊ねた。

「ん、ああ。なんでもねえよ。ちよつと向こうからの手紙を読んでただけだからな。昼間のダメージはもうなんともないから、気にすんな」

遼は無理やり笑顔を見せると、腕を回して元気だとアピールした。「手紙？　ははーん、遼、さてはあなた、向こうが懐かしくてホームシックになっちゃったのかしらあ？」

キララはニヤリと笑うと、遼に訊ねた。

「なっ！？　バカ言ってんじゃないねえ、オレがホームシックになんかなるわけないだろ！　それに、オレは泣いてねえ！　ちよつと目が潤んだだけだ！　用が済んだんならとつとと帰れ！」

遼は真っ赤な顔をして否定し、キララを部屋から追い出した。部屋の外から、「図星なんだー」とか言う声が聞こえたが、無視する

ことにして、いずみへの手紙を書き始めた。

さらにそれから半年が過ぎ、遼がハルゲンファウスにやってきて9ヶ月が過ぎた。半年前に指摘された“相手を傷つけることを嫌う”弱点を克服した遼は、予定よりも早く最終試験に入ろうとしていた。

「最終試験は、全力のキララと戦うこと。キララは前にも増して強くなって名実ともに学院最強クラスだけど、今の遼くんなら、五分五分くらいで戦えるはずよ。キララに勝つか、それに準ずる戦いぶりを見せれば、試験は合格。晴れて修了となるわ」

マリアは2人を外に連れ出し、校門の前に広がる広大な草原で、遼に試験のルールを話した。

「ええ、わかりました。けど、今のオレでもキララ相手だと五分五分かあ。他の奴らにはかなり勝ってるんだけどなあ……」

遼は頷きつつ、マリアの見立てに苦笑した。これまでの修行の中で、以前キララが人間界に脱走したときの搜索隊にいたガレリアたちとも何度か戦い、ガレリアには全勝、一番勝率の低いロツクでも勝率は5割以上だった。それで自信をつけていたのだが、さすがにキララは格が違うらしい。

「当たり前でしょ。このあたしと五分五分って言われるだけでも、十分すごいことだと思うわ。まあ、簡単には勝たせないけどね」

キララは相変わらずの胸を張って自分のすごさを強調する。

「遼、あんたまた……」

「細かいことは気にするなって。それじゃ、始めようぜ」

遼はキララが何か言いかけたのを無視して、彼女と向き合って杖を構えた。

「では、始めっ！」

マリアの開始の合図で先に動いたのは、遼だった。

「悪いな、キララ。これ一撃で決めるぜ。喰らいな、トルーナド・サンデ“竜巻雷”！」

どうやらすでに発動直前の状態で溜めていたらしく、速攻で放たれた竜巻がキララに襲いかかる。

「遼、あんたやっぱりあたしをなめてるでしょ？　こんなものであたしを倒そうっていうの？　甘い、甘すぎるわ」

キララは顔をしかめると、手を突き出して防御障壁を展開したが、次の瞬間、竜巻は障壁ごとキララを飲み込み、竜巻が過ぎ去ったとき、障壁はどこにもなかった。竜巻とともにどこかへ飛んで行ってしまったらしい。

「えっ……？」

「甘いのはお前だ、キララ。オレがそのくらい予想してないとも思ったか？　障壁ごとぶっ飛ばす威力を込めて放ってるに決まってるだろ。さて、竜巻だけだと思ったら間違いだぜ、落ちろ、雷！」

遼は呆然としているキララにニヤリと笑って解説すると、今の魔法に込めた、もうひとつの攻撃である、雷を障壁がなく無防備なキララに落とした。

「きゃあああ！！」

キララはまさかの展開に悲鳴を上げた。

「勝負、あつたな」

遼がそう言つて背を向け、キララはなんとか立っていたものの、杖を握っていることができずに、カランと言う音をさせて落としてしまった。

「そこまで！　勝負あり、勝者、遼くん！」

マリアが終了を宣言し、2人でキララに駆け寄った。

「参ったわ、遼。まさか2段構成の攻撃魔法だったなんてね。あ、自分で治せるから、大丈夫よ」

キララは自ら治癒魔法ヒールを使って回復すると、立ち上がった。

「さすがにお前を倒すには、並の威力じゃ通じないし、あとは意外性もないと勝てないと思ってたからな。これは昨日の晩から考えてた戦法だ」

遼は笑いながら話し、一度学院内に戻っていった。

翌日、理事長から修了書もらった遼は、寮を引き払って帰る準備をしていた。

「遼、修了おめでとう。でも、まさかたった9ヶ月で終えるなんてずいぶん早かったわね。1年以上はかかるはずだったわよね？」

そこにキララがやってきて、遼に話しかけた。

「そうだな。まあ、早く済んで良かったよ。ここはちょっと季節の変化がわかりにくいけど、向こうはたぶん3月。今帰れば、ちょうど新学期から復学できるはずだ。オレはまた2年生をやり直さないといけないから、いずみたちの後輩って扱いになっちまうけど、そこは仕方ないと思ってる」

遼は荷物をまとめながら、キララにそう話すと、

「人間界に帰ったら、もうこっちには来ないの？」

不意にキララが訊ねた。

「ん？ どうだろうな……わからないけど、一応こっちに来る時に使ってた、“鏡を使った簡易ゲート魔法”だっけか、あれを教えてもらって、来れるようにしてからオレは向こうに帰るつもりだよ」

遼は少し考え、来るかわからないけど、来れるようにはしておくという答えにしておいた。

「そうなんだ。じゃあ、また会えるわよね？」

キララは遼に確認するように訊ね、

「ああ、そうだな。ってか、オレが来なかったら、お前の方からまた脱走してでも来るとか言うんだろ、どうせ」

遼は頷いたが、半ば呆れたような顔になって、キララに言い放った。

「まあね。でも、遼の方から来てくれれば、わざわざ脱走しなくてもいいから、たまには遊びに来てよね」

キララはあっさり肯定し、遼は苦笑するしかなかった。そうこうしているうちに遼の荷物もまとまったので、遼はキララに「礼を言いたいから、みんなを校門のところに集めてくれないか」と頼み、

寮を後にした。

「それじゃあ、皆さん。9ヶ月もの間、お世話になりました。時々遊びに来るつもりなんで、そのときはまたよろしく」

校門のところに集まった、ガレリアたち元捜索隊の面々や、マリア、キララ、理事長以下理事会の面々たちに向かって、遼は深々と頭を下げた。

「うむ。身につけた魔法の力、使いどころを間違えないようにな。元気でやりなさい。もちろん、いつでも遊びに来るといい。歓迎するよ」

学院側を代表して、理事長のハルカンが柔らかな笑顔を見せて遼に告げ、遼はもう一度頭を下げると、振り向いてあらかじめ開けてあった簡易ゲートに飛び込んで行った。

「またね、遼！」

「へへ、ただいまっ」

佐伯家の物置にある鏡から出てきた遼は、物音に気づいて廊下に出てきたみずきに、ちよつとはにかみながら言った。

「おかえり、遼。全部終わったの？」

予定では1年以上かかると言っていたはずの息子がわずか9ヶ月で帰ってきたので、みずきは心配そうに訊いてみた。

「ああ、ほら。修了書」

遼はみずきの言いたいことを察し、カバンから修了書を取り出して、みずきに見せた。

「それならよかったわ。父さんも地方の営業所からこっちの本社勤務になって、毎日帰ってくるようになってるし、今夜はお寿司でもとりましようか」

みずきは上機嫌で寿司の出前を頼むため電話を取った。

「ああ、母さん。オレ早速復学するための手続きに行ってくるから」
遼はみずきにそう言い残すと、家を出た。

「今日は3月19日。まだ授業中かな」

久しぶりに歩く、白稜ヶ丘学院への通学路。遼はたった9ヶ月離れていただけなのに、懐かしさを感じていた。

到着して、職員室に向かおうとしたところで、移動教室から戻る途中らしいいずみや俊とばったり会った。

「よう、久しぶりだな」

「遼！？ あんた、いつ帰ってきたの？」

いずみは驚いて、持っていた教科書やノートをバサバサと落としたが、そんなのお構いなしに遼に詰め寄った。

「落ち着けて、いずみ。 たった今だよ、今」

遼は相変わらずの様子のにいずみに安心しつつ、そう答えた。

「そうなの？ でも、確か1年以上は向こうにいるって言うてなかった？」

いずみは拍子ぬけしたように落ちつきを取り戻し、ふと旅立ちの前に遼が言っていたことを思い出して訊ねた。

「予定より早くことが済んだんだよ。やるべきことはちゃんとこなしてきた。別に逃げてきたわけじゃないから安心してくれ」

遼は苦笑して、事情を説明した。

「じゃあ、今日ここに来たのは、あれか。復学の手続きか？」

そう確認するように訊ねたのは、俊だった。

「ああ、そうだ。ってか、それくらいしかないだろが。まあ、オレはまた2年生をやり直すことになるから、年齢は同じでも2人の後輩ってことになるけど」

遼は頷いたが、わかりきったことを聞くな、と言いたげだった。

「まあ、なにはともあれ…… 遼、おかえりっ！」

VOL・18：エピローグ（後書き）

ブログで言ったとおり、忙しくなりそうなので、やむを得ず最後まで一挙更新という形を取らせていただきました。
これで完結です。

しばらくは新作公開はないと思いますが、準備を始める段階にでも、またブログに書くと思います。

感想など、いただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1835f/>

ハルゲンファウスの魔法使いと少年

2010年10月8日14時59分発行